

万象 平成十四年十一月十日第三種郵便物認可
令和二年十二月一日発行（毎月一回一日発行）
第十九卷 第九号（通卷二二五号）

万象

B A N S Y O

十二月号

2020. 12



謹告

飛高隆夫氏（創刊同人・万象作品
選者・さいたま）は、入院加療中の
ところ、令和二年十月十六日、逝去
されました。享年八十三。

平成二十五年八月号から本号ま
で、万象作品選者を務めていただき
ました。

ここに謹んでお知らせいたします。

万象俳句会



令和二年

十二月号

万象

B A N S Y O

一日一生。

一日は貴い一生である。

これを空費してはならない。

『一日一生』

内村鑑三

万 象

令和2年12月号

主宰作品 菊 酒 内海 良太 4

副主宰作品 秋の蛇 小林 愛子 5

風 音 集

飛高隆夫・江見悦子・柳澤宗正
山田春生・福島せいぎ・内藤恵子

続・万象と共に④⑧ 「万象ノオト」は面白い 内海 良太 8

同人作品

内海良太選 9

万象基金のご報告 30

同人作品の佳句 内海 良太 31

同人特別作品

大雪山連峰冬はじめ 岡本 敬子 32

墓 参 り 柳澤 宗正 33

飛高隆夫自選句鑑賞②⑩

手に触れて水の冷たさ冬牡丹 大山 春江 34
触るべきものにはあらず黒揚羽 加山ひさ子 34

福島せいぎ・内藤恵子自選句鑑賞⑧

風船に百歳の息吹き込みぬ 大村 峰子 35
明易し攻め焚きに壺透きとほる 安岡みさき 35
せいぎ 恵子

三澤姉妹句集鑑賞 「俳句」 9月号より 36

特別作品評 (十月号) 37

同人作品評 (十月号) 38

句集鑑賞 生きる力の漲る句集 「薫風」を読んで 40

万象招待席 白砂踏む 42
日焼の子 ー亡き弟へー 43

万象ノオト「つば」 44
俳書探訪 46

巻頭作家 (十一月号) プロフィール 中鉢弘一 (札幌) 47

万象作品 飛高隆夫選 48

万象作品の佳句 63

同人会便り 第三回中山純子記念俳句賞作品募集／珈琲ぶれいく⑦ 65

「万象」この一年 66

「万象」同人句会報 (九月例会に替えて通信句会) 68

句会一覽 75

東西南北 76

菊

酒

内

海

良

(主筆) 太

雨の日の螢袋に籠りたく
菊酒に酔うて客だか亭主だか
夏瘦せもせずに試着の大鏡
本堂の畳の蟻蛸捉へたる
親鸞の寺の銀杏落ちはじめ
月を待つ稲架の温もり身にまとひ
雨音の秋となりゆく八重葎

秋の蛇

小林

愛子

(副主宰)

盆の月砂丘へ父母を置き去りに
盆過ぎの留まる雲と行く雲と
野分晴れ蜂がこつんと肩の辺に
植木屋の紺のバンダナ小鳥来る
切りし枝みな月光に打たれあり
やはらかく犬に曳かれて草の花
秋の蛇水辺の杭に身を結び

風音集



天高し

江見悦子

(編集人)

朝顔の青にはつかかな通り雨
冷房に籠るひと月過ぎにけり
塩加減良き中辺路の目張り鮓
竜淵に潜めり王子の水垢離場
葛嵐行合の空暮れかかる
熊楠の細字百卷天高し

流れ星

飛高隆夫

(万象作品選考)

杉山に杉の香りの蟬時雨
蟬時雨染み入る古代墳墓かな
雨に濡れ朝日に濡れし百日紅
どろどろと泥色の滝秋出水
堀辰雄風に佇む晩夏かな
流れ星見たことにして眠りけり

初秋刀魚

柳澤宗正

(同人会会長)

水打てば猫が貌だす裏通り
休業が廃業となり夏終る
ごくごくと鳩が水干す残暑かな
雀蜂虫をまるめて秋空へ
コンビニの迫る畑や昼の虫
小振りなり膳の真中の初秋刀魚

萩の道

山田春生

(顧問)

青夜空

内藤恵子

(顧問)

桔梗や哲学の道はるかまで
子規飴をなめて子規忌の縁に座す
色鳥や福の神売る朝の市
養生の酒買ひにゆく萩の道
月の出や家路いそぐないそぐなよ
真夜中の月あばら屋の中天に

秋 旱

福島せいぎ

(顧問)

こりやなんじやくちなは川をわたりけり
蟻の道どこまでつづく青畳
喪歸りの法衣塩噴く油照
台風来枕を抱へうろろす
虫喰ひのすすむ赤松秋旱
鮎落つる妻のふるさと水匂ふ

葉の裏の棘鋭かり秋茄子
海女小屋の屋根に干さるる新玉葱
浅沙の花水面に長き根を引きて
夕映えにゆりの木青葉の並木かな
秋霖や池に一羽のかいつぶり
望の夜の透きとほりたる青夜空



「万象ノオト」は面白い

内 海 良 太

「万象」誌の中期にある見開き2ページの「万象ノオト」は面白い。

月毎のテーマに、5〜6名の執筆者が330字ほどの文章を寄せている。私は「万象」が届くとその日の内に読んで感心したり、認識を新たにしたり大いに楽しんでいる。

「万象ノオト」は、主に「万象作品」の作者に執筆のスペースを確保しようと始まった。

平成19年10月号が第1回で、もう13年も続いている根強い人気の連載である。現在は誰でも投稿できるようになっている。

「万象ノオト」の「ノオト」は中野重治の「斎藤茂吉ノオト」に倣ったもので、クラシカルな感じもいいなあと言うぐらいで深い意味は無い。内閣告示で外来語の伸ばす音は「ノート」と「」の長音符号が望ましいとあるが、「ノオト」でも間違いではない。

カットの椅子は、ゴッホの絵「アルルの寝室」からお借りしたもので、素朴な木の椅子に座って「万象ノオト」をご覧くださいという趣向である。

初代の編集担当は榎本文代さん、二代目は久留島規子さん、今は三代目の桔梗純さん。原稿注文には、皆さん快く引き受けてくれるので助かると言っている。

この13年間で執筆者は延べ750人は優に超えているので、心当りの方も多いだろう。

正岡子規は晩年「写生文」を提唱した。俳句の対象をありのまま写す「写生」の概念を散文にあてはめたもので、具象的な描写、「山」となる主眼点の設定などを提唱し、優れた文学作品や作家を輩出している。

「万象ノオト」は体験に基づく話が多い。簡潔で節度のある文章を読み進めていくと自然や人生の素晴らしさを思い知らせてくれる。事実を飾りなく書き連ねることによって、読者に書き手の体験をそのままリアルに伝えてくれるので面白い。

万象では「写生」を勉強している。「万象ノオト」の文章が生き生きと書かれているのは、日頃の「写生」の精神が染みついていいるからだと思う。

同人作品



内海良太選

○は佳句に選ばれました。

札幌 松原智津子

只今の声待ち秋刀魚焼き日あり
○初刈りの稲穂地酒の蔵元に
鯖おろす研ぎ減りし出刃母ゆづり
古書店で立ち読む句集秋灯下
天の川瞬き尽きぬピチカート

札幌 岡本敬子

朝霧や馬は貌より見えて来し
○掌の窪のいろやかたちや草の種
松手入あとの門口闇にほふ
くろがねの重さ寂しき秋風鈴
花びらごと匙で掘り出すめうがかな

札幌 濱谷和代

夏の果て流れの速きちぎれ雲
うそ寒や重機轟く廃屋に
秀の葉擦れ高鳴る釣瓶落しかな
飛び石を穿つ雨だれ乱れ萩
○秋うらら花色ごとに種集め

札幌 大内和憲

ムツクリに釣瓶落しの風さわぐ

○リゾールの手もて一気や新走り
カルテ記せば了る往診夜寒中
秋蝶の翔ちてこぼせり薔薇の露
色鳥来日なた日蔭を入り乱れ

札幌 紅 露 恵 子

新涼やピクルス瓶の粒胡椒
カピバラの鼻孔大きく秋暑し
うねりつつ地を這ふ幹や藤は実
に月明り肘掛椅子に身をまかす
鴉どち声なく集ふ黍嵐

札幌 大内 マ キ 子

羊みな柵を動かぬ残暑かな
穂芒や馬首つややか厩舎出づ
薦茂る空の綻び縫ふやうに
掌に掬ふ水の底にも雲の峰
砂の舟砂に戻りて秋の海

札幌 落 合 裕 子

水遣りの鉢花やせる処暑の朝
歪なるゴジラの卵てふ西瓜
路地裏に揺れて鮮やか大毛蓼

句友の手一枝たわわにキウイの実
抜き呉れし藤村旧居の吉祥草

江別 佐 藤 哲

ななかまど赤き実付けて九月の顔
マンション出来秋灯ともる大都の夜
里の川鮭ぶつけ合ひ泳ぎけり
○開拓碑祖父の名うすれ虫すだく
休耕の田んぼにぎやか虫の声

苫小牧 林 陽 子

隠沼のやんま水打つ三拍子
一万歩目指す九月の夕日中
夫の白湯今朝はひと匙生姜汁
木槿の花溜めし新聞休刊日
庇より光る一すぢ蜘蛛降りる

秋田 小 松 敏 郎

祭り膳鯉の甘煮の羽後料理
町長も番楽を舞ふ星月夜
迎火や島で戦死の兄二人
鉢夫墓石榴一本枯れ残る
バケツ駕籠孫三人の栗拾ひ

新潟 佐藤 雄二

空濠へ声降り落とす蟬しぐれ
初山の香に深々と猫眠る
野分あと草立ち上る蒲原野
三百年の杉を震はせ蟬しぐれ
安吾碑に思案顔なる墓

新潟 高橋 ひろ

大川は阿賀の通り名蘆の花
○八方へ萩自らの花撒ける
憎らしいほど蔓盛んさねかづら
草かげろふ追はれた蔓へすぐ戻る
鳥風の成れの果なり鳥威

新潟 森山 暁湖

境内は蟬の宝庫よ賑はしき
溪流の岩に踏ん張り岩魚釣る
鉦叩厚みましたる夜の帳
新涼や三色ペンの使ひ分け
胃の疲れいつしか癒ゆる涼新た

新潟 光岡 れい子

鉦叩今日もこの場所この刻に

蓮の実を飛ばし切つたる大花托
初尾花出土の須恵器縁欠けし
秋光や日本遺産の陶の町
茶室まで飛石五つこぼれ萩

芳賀 大村 かし子

鉢植ゑに液肥をあたふ処暑の朝
早稲の香の漂ふ夫の三回忌
植込みに仕舞はぬ梯子小鳥来る
○寄せ植ゑに乾き切つたる鴟の賛
故郷へ筑波山隠るる秋微雨

宇都宮 阿久津 勝利

初秋刀魚揚がる港の散髪屋
民宿や疎開以来の秋の蚊帳
副都心の回転ドアを出て残暑
山頭火の七文字の句碑苔の花
山口耕堂碑忌日・九月十九日
○句集開き忌を今日と知る子規忌かな

栃木 上岡 佳子

コンビニの屋根に弦月電池買ふ
秋空へ浅葱斑の青の消ゆ
親離れの鶴鶴高く早稲田かな

一尺の猿田彦の碑つくつくし
軍配は蟲履の力士栗おこは

佐野 亀田 やす子

木の椅子に憩ふ色無き風の中
横縞のシャツ目立ちたる大案山子
畦川を越え盛んなる千人草
初刈りの稲の香りのとどきけり
稲架棒を打ち込む音の遠くまで

佐野 増田 幸子

あさぎまだら弁財天をいくたびも
秋夕焼背に去ぬ鳥と向かふ鳥
浮棧橋の揺れにうべなふ秋思かな
筒袖の野良着の案山子前日光
新牛蒡香りの中に笹がきを

佐野 加藤 季代

○丸めたる反古ほどけゆく秋思かな
肘張つて新蕎麦を打つ杣の人
石臼を挽く音重し走り蕎麦
水が水追ひかけてゆく落し水
夫の忌や供花に秋蝶秋の蜂

佐野 鍋島 広子

斎田を群れてとび翔つ稻雀
蝗とび室の八嶋の杜に消ゆ
豊の秋村に一軒蕎麦処
曼殊沙華子に抱へられ墓参かな
○天高しセスナを離るるグライダー

佐野 阿部 澄

文学館田山花袋文学館に一人の刻や秋思ふと

花袋居の太き木の榎蟬しぐれ
新涼の樹々の影置く花袋の居
聖堂に隣る無花果畑かな
大壘の蓮の実飛んで玉砂利へ

佐野 芝宮留美子

天明鑄物の風鈴あまた城址に
葉蔭なる蓮のくれなる濃かりけり
沼風に葉のさらさらと花真菰
花袋居の縁に木洩れ日秋の蜂
ハッシュド・ビーフ窓の秋雲見てゐたり

佐野 島田 和枝
笹舟の行方見送る晩夏かな

水の音 湿原の秋はやめたり
涼 新たな翁面打つ檜の香
みんみんや笑ひ閻魔のいとけなく
那珂川の流れを前に鮎を食ぶ

佐野 茂 木 弘 子

新涼や沼辺の風を胸深く
片葉の蘆沼の暗みのひと処
雲龍寺七八本の竹の春
正造の墓所へと渡る萩の風
新米の光を握り三龜山

足利 大 木 茂

僧三千学びし寮や法師蟬
うどん屋に県外車混む秋の雨
まだ横を向く豆台風の予報円
みんみんや大修理成る孔子廟
分水嶺近き激流初紅葉

土浦 澤 照 枝

釣瓶落し鉾山跡へ道細る
秋薊鷄捕り切戸の門閉ざす
秋の浜うす紅色の貝拾ふ

神域に鳥も居ずとや秋気澄む
霧迅し樹々のまにまの句碑湿り

さいたま 山 本 右 近

○白秋や風見ゆるまで窓磨く
手のひらに砂つぶの綺羅白露かな
青北風や雲影の疾き近江富士
蓮華坐に金と朱のあと秋ともし
北を指す船の積荷に望の月

志木 中 村 千 久

蜜を吸ふとき夏蝶の無心なる
墓洗ふ苔の残りし爪の先
水菓子とふ言葉なつかし桃を剥く
古代文字浮く新涼の硝子壺
身に入むや句会にひとつ足らぬ声

室伏盛氏逝く
所沢 三 好 か ほ る

霧湧いて火点し頃の山の小屋
山盛りのりんご売り出す信濃径
紅茸のモスクのやうな円みかな
山国の李の熟れて終戦日
山小屋に櫓の薪積む冬仕度

所沢 森岡 恵子

白鷺の連れ舞ふ空の青さかな
〇凝然と木々立ちつくす大暑かな
河骨を映す水面に雲流る
岩肌に高なり滝の落ちゆけり
満天に星の瞬き朴散華

所沢 南雲 秀子

えぞにうの咲く信越の旧鉄路
白露かな杳掛宿と石碑立つ
道灌のゆかりの里の走り蕎麦
色づきし稲田の果ての雲白し
百日紅今年二度目の花盛る

入間 山口 素基

番町の神輿の鈴を貰ひけり
茶杓もて水割りつくる夜長かな
三山のすぐそこに見ゆ良夜かな
刈られぬし高麗の郡の曼珠沙華
昼の虫鳴いてゐるなり巾着田

千葉 田中 道江

牛は口開けしままなる炎暑かな

袖なしの二の腕にあり今朝の秋

白萩のなだるる垣や母の声

安土城帰燕の空となりにける

大股にゆく安土城ばつた跳ぶ

酒々井 竹澤 竹里

烏賊釣船天の灯りか集魚灯

燃盛る紅葉を映す疎水かな

紅葉散る疎水に競ふ高瀬舟

涸沢に飛火してゐるななかまど

ちちろ虫玉座に座して鳴き通す

酒々井 中嶋 久登

ヘルメット外し盆僧着替へせり

神鏡の二百二十日の青き空

秋風や昭和の町の置屋跡

稲妻や稔豊かな田のあらは

初秋の角度変ふるや風見鶏

佐倉 内海 保子

馬小屋に山の水引き女郎花

ニコライ堂白露の鐘のひびきけり

浅井忠の像に吹き寄る夏落葉

和紙のごとシート乾ける炎暑かな
距離保ち人の集へる子規忌かな

佐倉 大内 佐奈枝

骨太の案山子に夕日あふれたり
ふるさとの町史をひらく秋燈下
花道の引幕煽る野分かな
地芝居のはねて鳴き出す昼の虫
村芝居守りて長の老いにけり

佐倉 三屋 英俊

○国破れ残暑の鉄路行きしこと
敗戦日ルーペの隅の歪み文字
秋めくや牛舎に灯る薄明かり
洋菓子の小箱そら色小鳥来る
更けてなほ火照る地球や星奔る

佐倉 横川 良子

トーチカが遺る街なか秋の風
沼尻に嵐の名残蘆の花
○ほんだはら絡む木端や秋の浜
運針の針目揃はぬ秋の暮
浚渫船真中に据ゑて秋深し

四街道 奥 太雅

読経する脇へ落ちたる大百足虫
青空に譬帖とんぼの棒となる
セロテープ芯の抜け出す極暑かな
峰雲の輪郭白く輝けり
草色のがちやがちや帰す草の上

四街道 塗木 翠雲

紺碧の空を自在に夏燕
滴りの光を零すチバニアン
野分雲野猿親子の疾走す
鉄砲百合雄蕊雌蕊の相寄らず
青無花果膨らみ初むる綾子の忌

船橋 山下 良江

地団駄を踏むかに夜の大雷雨
踏み石に大往生の蟬の殻
涼風や声の散らばる夜の河原
抽ん出し秋の麒麟草生きいきと
一坪のあるかなきかの袋掛け

船橋 大山 春江

父母の墓へ藪蚊の坂登る

旅 鞆夏の匂ひの残りたる

捨て魚網の山をつらぬく尾花かな

○海女小屋の柱に鏡屋の虫

野分晴樟の折葉の香りたる

船橋 赤堀 洋子

菩提寺の山を一つに蟬しぐれ

菊坂や鉢に真つ赤な鷹の爪

逍遙のゐさうな旧居秋海棠

きらきらとまだ翅やはき秋茜

納得のひとつ見て寝る流星群

船橋 久保村 淑子

青空の隙間から降る驟雨かな

黒揚羽のめぐる木蔭のレストラン

かなかなは遠くみんなすぐ上に

猛暑日の蟬は鳴かずに木に並ぶ

○橋ぬけて水音変はる秋の川

船橋 片桐 帆一

故里へ高きに登り両手ふる

朝霧や小諸古城を低く巻く

○草紅葉自転車ねかせ遠浅間

林檎むく音のかすかに夜更くる

旅立ちし級友たちの秋の声

船橋 宮本 加津代

己が影すつと日傘にたたみけり

法師蟬鳴けば夫の忌めぐりくる

秋蝶をまづ飛び立たせ供華を剪る

雲の下雲が流るる芒原

梅一つ腹に抱かせて煮る鯛

柏 山本 とく 江

鮮やかに秋の虹立つ綾子の忌

鳥ほどの影落し行く秋の蝶

黒塀に沿ふ一列の曼殊沙華

空と水澄み渡りたり逆さ富士

三密を避けたるメール鯛雲

柏 松原 三枝子

門柱にはらり鷹の羽薄かな

一人居に風船葛白き花

金柑の徒長枝あをき棘ばかり

小鳥来る住宅街に残る森

雨あがり路地にこぼるる式部の実

柏 内 田 郁 代

水筒を襷に掛けて秋通路
秋蟬や使用禁止の宮土俵
新涼の箒目著き鎮守かな
形良きを誉めて冬瓜もらひたり
沼に立つ片脚のみの秋の虹

柏 古 川 京 子

明日伐る木に白露の水をたつぷりと
燻るだけの茅屋の囲炉裏ほたる草
山並の影なす青梅下り鮎
落鮎に仕掛けころがす日和かな
葛嵐退助像の眼の力

流 山 沢 辺 た け し

甲虫兜を蟻に運ばるる
蒸暑し鮎と泥鰌の水族館
坂鳥の一枚となり尾根を越ゆ
みそはぎの濁りし水に影の濃く
腰の藁抜いて束ぬる稲穂かな

流 山 穂 苅 照 子

祭なき日本に残る暑さかな

石段の先に石段天高し
新しき木道の香や小鳥来る
野馬土手に盗人萩の風淡し
片翅を風に攫はれ秋の蝶

浦 安 田 中 幹 也

道暮れて人待ち顔の赤のまま
爽籟や笕の水のハーモニ
雲白く半月白く賢治の忌
稻香り潮の匂へる安房の国
追ひ越さる夕日の道や鳳仙花

東 京 谷 田 部 栄

子規の忌や昭和は飢ゑと飽食と
落蟬に草の雫の二三滴
手を上げて呼び合ふ涼しき間合かな
そのうちと言はれ沙汰なし秋の蟬
戦争の傷が自慢の裸かな

東 京 須 賀 允 子

新薄ほぐれ初めたる空ま青
下闇に彩増す水引草の紅
先だちて白曼珠沙華薬ながし

子規の忌や糸瓜はいかにと思へども
秋分や介護ベッドに呻吟し

東京 降幡加代子

池の辺に百日紅の花咲きにけり
池の辺にアメリカ梯梧色付けり
黒揚羽アマリスの蜜吸ひに
山吹の花一輪の咲き残る
水澄しの輪を喜べる女の子

東京 名和政代

籠に乗る金毘羅さんや秋さやか
稲妻や煤ける庫裡に観世音
一枚の刈田の夕べ義民の地
○青柿の色づき初むる子規忌かな
竹伐つて縁台とする鞍馬寺
長き夜や徒然草を読み返す

東京 山本絢子

八岳の嶺々三色に染めて秋夕焼
静けさの中に聖歌や秋深む
道祖神供花も萎るる残暑かな
ひとり聞く勸進帳や秋の暮

コロナ禍に予定取り消し秋淋し

東京 藤田裕子

スパイスを強めに処暑のカレーかな
客待ちのタクシーの列大西日
油蟬鳴けりコンクリの電柱に
一筋の流れのごとく秋の風
やうやくに雲を透かして盆の月

東京 赤松郁代

新涼の膝揃へたり女学生
ひとしきり鳴いて軽身の法師蟬
段々畑辣萋の花を縁取りに
雨止むか夕かなかなの鳴きはじむ
真先にマスクを外す残暑かな

東京 島野ひさ

穂芒のなびく川原や夕日落つ

豊島園二句

○閉園の空を離れぬ帰燕かな
秋風の回転木馬今日閉園
貼紙に墨くろぐろと今年米
秋めけばユトリロ色の夕まぐれ

東京 佐藤 晴子

祇王寺の竹のさゆらぎ秋気澄む
白朝顔懐かしきひと思ひ出す
花漆零して峽の雨上る
秋気澄む一夜明けたる弥陀ヶ原
浜辺行く松籟今日は秋風に

東京 加賀 葉子

灸据うる白き天井なごりの蚊
蠟燭を敷居にこする秋湿り
水門の鉄階段や鱗雲
川迄のだらだら径や曼殊沙華
マシユマロの触り心地や晩秋蚕

東京 久留島 規子

松茸や中国産は買ひませぬ
白鷺の脚黒々と秋の水
○半島をまつすぐ北へ野分過ぐ
黙黙とひとり栗剝く夜長かな
赤梨の皮に残れるあをみかな

東京 下 嶽 孝一

馬追の澄みし声来る夜の厨

せせらぎの草蔭虫の二重奏
向かひ合ふコロナ禍の卓新豆腐
四つ目垣越ゆる一対秋の蝶
青空へ秋果あふるる開店日

東京 杉浦 一子

爪痕を残し台風去りし空
一雨に移る季節や獺祭忌
山頂^{伊吹山}は肌にひんやり秋の風
豆の香の青き匂ひや新豆腐
こんがりと焼けて秋刀魚の化粧塩

小平 吉村 光子

ばつた跳ね昔の田圃もどりけり
山寺や蟬の声聞く夫の顔
夫と歩む万里の城や秋日和
百日紅命惜しめと咲きにけり
干し柿も熟柿も母の味なりき
夫と食む幸せの味栗ご飯

立川 疋田 華子

補聴器に大合唱の虫の声
犬蓼や猛猛しくも兜塚

さはやかに野川に落つるファウル・ボール
福耳のピアスの光る敬老日
アマビエの土鈴を鳴らす九月尽

町田 吉 中 愛 子

川の字に鯉の流るる牧水忌
繭の^{夫救急車に}実の枝摺り上げて救急車
病中にあり一口の菊の酒
稔田を背に野仏の眼瞑りぬ
御神灯点りて杜の秋深む

町田 広 瀬 俊 雄

真直ぐに縄を張りたる大根蒔
老農の田水落して去りにけり
○ひと株ごと鎌で稲刈る三角田
稲刈るや山田錦の茎大事
アトリエの窓に映ゆるや曼珠沙華

町田 桔 梗 純

桃の香や夫の包丁ぎこちなく
白雲の割れ満月は暈の中
径の辺の鶏頭太し綾子の忌
師の忌日間近上総の梨届き

目覚めたる夜半満天の星明り

日野 喜多尾明子

鼓笛隊ピタリと止まり天高し
秋茗荷日暮れて風の湿りかな
紫蘇の実や漬物上手の祖母なりし
崖下に拓く畑や竹の春
芙美子の庭古木に柘榴の実太る

横浜 榎 本文代

二百十日万年筆のインク切れ
バス停に不揃ひの椅子百日紅
秋の蚊にまぶた腫れたる少女かな
○踏み込めぬ草の深さや昼の虫
いびつなる多摩の大梨仏壇に

横浜 西 本 才 子

○湧き水の流れゆるやか芋洗ふ
山迫る御堂閉ざせり吾亦紅
迷ひこみ胸まで埋まる真葛原
柴垣の裾に沿ひけり秋の蛇
夕空へとどかんばかり紫苑かな

横浜 川 越 昭 子

逃水やバッグの中の電話鳴る
張り替へて網戸涼しき秋の風
みんみんや絶ゆることなき山の水
会場に折詰届く暑氣払ひ
潮の香や三崎につづく冬瓜畑

横浜 大 橋 雅 子

休み明けの声する校庭灸花
網伏せて友呼ぶ男の子蟻蛸捕り
巨大岩の漁港記念碑法師蟬
垣に垂るる歪な糸瓜自肅産
爽やかや招待状の金の総

横浜 山 崎 郁 子

塩釜を焚きて過ぎゆく夏休み
流れ木を浜に干したる日の盛り
流れ木を焼べて煮つまる夏の塩
○煮つまりて夏藻の混ざる塩の粒
結ひの人吠に分くる夏の塩

横浜 田 賀 煤 恵

ひぐらしのこゑ透き通る夕べかな

川底の石にも秋の日差しかな
ふと目覚めちちろと闇を分け合ひぬ
よき水を生む大山の新豆腐
夫在らば遠まはりする良夜かな

川崎 山口 千代子

奥行の深き古書店秋夕日
ボタン穴かけ違ひたる残暑かな
駅名を味はひ乍ら立葵
帰宅路の闇に一列白マスク
背伸びして墓の天辺秋の水

川崎 大久保 進

買ひ足しの晩学ノート法師蟬
重なりてこゑの膨らむ秋の蟬
底紅の昨夜の雨粒綾子の忌
一刷毛の雲や五色の秋桜
○やはらかき雨の触れゆく花野かな

鎌倉 恒 川 清 爾

爽やかや二冠少年はにかみて
かなかなや父の机に煙草跡
初秋や富岳黒々浮かびたる

蛇穴に足場崩れし切通し
海の色今日は濃き碧震災忌

横須賀 織田 みさゑ

夏やせて鏡に写す肋骨

○病葉の小流れにさへ逆らへず
戦死せる兄の墓標や露しとど
照り曇り紅葉且つ散る夫の墓
穂芒を野に在るごとく活けにけり
月今宵生くる支への一行詩

茅ヶ崎 三 澤 治 子

夏休みがまんする事おぼえし子
もがく蟬拾うて空へ放ちけり
片づけて広き座敷や盆の風
悉く硝子の器 夏料理
○一つづらゐ落ちてきさうな星月夜

伊勢原 佐 藤 和 子

ピーマンの中より菜虫出てきたる
太田道灌の首塚
「八海山」供ふ首塚昼の虫

苦瓜の松の天辺より垂るる
紅萩を擦りて徐行のバス過ぐる

小鯛の釣れるそばから割かれたり

秦野 佐 藤 嘉 洋

林道に懸樋の手水秋海棠

稲妻や点滴の管青光り

早稲の香や棚田に峡の水迅し

秋桜添へ朝採りの野菜着く

鹿二頭跳ねて阿夫利嶺開けたる

松本 中條 今日 子

新調の夏旅を待つ車椅子

町長もお船まつりの列にあり

河鹿鳴く岩風呂に月さし来たり

分け入れば土のしめりや竹の秋

夏こたつ木曽路の奥にけむりかな

富士 神田 美穂 子

鉢植ゑの葡萄五房の袋掛

反芻の鹿が目つむる片かげり

倒木の重なる樹海夕かなかな

今日処暑の午後より雨を賜りぬ

色なき風煉瓦造りのワイン倉

静岡 大村 峰子

銀竜草修験の山の登り口

○天蚕に湖の青さの映りたる
校名の残るバス停虫すだく
ダムの村照して月の昇りけり
盆明けの立枯れ目立つ父祖の山

静岡 海野 みち子

夫の忌の近し朱を増す秋海棠
亡き夫の杖に縋れり子かまきり
捨て畑に鉄砲百合の林立す
四阿の炉辺に鬼の子吹かれをり
三粒づつ指先捻り大根蒔く

静岡 宮崎 知恵美

日にかざすアイスキャンディ海の色
海と空境目の無き残暑かな
○魚屋にマンゴー売られ香を放つ
百日草けふのあなたは何日目
草むしり姉のたち日の墓の前

静岡 長島

朝採りの紫蘇の匂ひの厨かな

操

墓洗ふ夫の背中を流すごと

○満水の湖 初秋の月 赤き
涼風を浴びて湖上の音楽祭
胸元を風の通りし今朝の秋

静岡 岩崎 武士

鮎落ちて峠色付き始めけり
○威銃一発村を撃ち貫きぬ
山の端に夕星ひとつ水落す
鯛雲先の見通し立ちにけり
文机に膝小僧打つ子規忌かな

静岡 曾根 満

御破算にならぬ人生竹煮草
髪切つて妻鬩病の夏を耐ふ
遺跡掘る中に着莫蓮のをんな達
○原爆忌自販機押せば水の出る
赤とんぼ湖を眼下の牧に舞ふ

静岡 藤原 千代子

全身に早稲の香吸うて散歩かな
郵便夫に山羊が声掛く花カンナ
鐘楼は電気仕掛けよ杜鵑草

○稻雀翔つや百羽の風起こし
更くるほど月の小振りや小松原

静岡 荻野加壽子

独り居のわけそれぞれや盆の月
秋暑し紙石鹼の溶け残り
賢治忌の星降るやうに銀木犀
墓のある処ふるさと法師蟬
檸檬切るいく度人を偲ぶ夜

静岡 小川明美

海の日や繋留船の波に鳴く
梅雨の霧金採掘の谷を這ふ
麦酒買ふ村一軒の油屋に
校庭に轍一筋男梅雨
とんばうの眼に現世の歪みをり

静岡 藤本節子

爽やかや湖面を走る水の璧
木歩忌や鴉真つ赤な口開き
がちやがちやや腓返りの襲ひくる
檸檬切るアールグレイとモンブラン
石垣を積みて一族実山椒

短冊は一期一会よ白木槿
山水に浮かせ刃を入れる新豆腐
朝顔の守一の紺もて咲ける
鬼やんま金の仏をのぞきけり
御山洗過ぎたる富士の屹立す

静岡 加山ひさ子

残暑なほ音つつぬけの更衣室
白壁に吾が影美しき九月かな
物言ふも淋しくなりぬ秋立つ日
静けさに高く跳ねたるとどかな
縞蜥蜴の縞の残像野面積

静岡 吉野美智子

水澄むや魚持て余す鷺の嘴
引く波のさらさら光る厄日前
仏壇にこつと置かるるラ・フランス
古新聞束ねてをれば昼の虫
虫の音を遠く近くに寝入りたる

静岡 石川裕子

母の忌や日ごと紅増す水引草

屈まねば見えぬ色なり花茗荷
ぬゝつと出る花芽の列や彼岸花
手始めに仏間の障子洗ひけり
ガスコンロのランプ点滅秋暑し

静岡 望月 敏男

十勝より結婚の報新大豆
燃えてゐる陸軍墓地の曼殊沙華
放牧の牛を呑まんと霧の這ふ
椰子の絵の古りし伝單終戦日
同期会果てて秋思の家路かな

富山 若島 久清

ずわい蟹干物と並べ小商ひ

水見浜通り
新型コロナウイルスにて風の盆中止

○口三味線風の盆とて繰り返す
ウィルスのマスクで厄日の町に居り
いく度も野分をしのぐ梨の傷
星降るやひねつて点す夜業の灯

射水 成瀬 真紀子

パラグライダー地を蹴り秋の風撫む
標本の翅の光沢鏡花の忌
語部に消えぬ悔いあり八月尽

水音の八尾の町や芙蓉の実
秋暑しチャドクガに腕腫れ上がる

金沢 岸川 素粒子

人の世の仮設の楽土夏の月
ひたくとひたくと老秋近し
日時計のうすき影引く溽暑かな
由緒の名戻りし町や水を打つ
働かぬ脳の迷路や日雷

金沢 田村 愛子

稔り田に隣り休み田秋茜
笛の音の流るる里や万燈会
万燈会里の五ヶ寺を照らしけり
顔知らぬ祖父母の墓や秋彼岸
蓮の実の飛び何ごとみなき一ト日

金沢 井村 和子

共白髪なりしと語る星逢ふ夜
水枕ぐらりと頬に星月夜
早世の遺影に供ふ新走り
加賀越中分かつ峠を墓参り
齒治しの地蔵を撫づる早稲の風

金沢 中 條 睦 子

あけび熟れ師の亡き家の深閑と
○浄土句碑こほろぎの闇深からむ
白秋や歳時記持ちて入院す
左手の厚き包帯癩祭忌
点滴の一てきに澄む空の色
捨つる本また読みふける夜長かな

金沢 今 越 み ち 子

天水桶に羽団扇の紋秋高し
かなかなや腰をくねらす異国仏
土牢の地蔵に誰か猫じやらし
粃殻の畝に出揃ふ貝割菜
新涼や腕に極細注射針

金沢 伊 川 玉 子

遠くより目印となり百日紅
赤とんぼ百万貫の石叩く
小鳥来る餅喰ひ地蔵の由来かな
パン買ひにこの坂が好き青芒
きちきちを啗へ引き合ふ雀かな

金沢 伊 藤 美 音 子

遡る波ぶち切つて鱸かな
足ならず夫に日傘をさしかけぬ
瀧行の髭面息を調ふる
「罪と罰」読み余したる八月尽
石仏と対峙白花曼珠沙華

金沢 高 田 た み 子

無花果や母の忌日の近くなり
水遣りのホースの絡む秋暑し
骨せんべいバリバリ噛んで秋暑し
矢を放つまでの静寂秋気澄む
白菊の供華一抱へ愛馬の碑

金沢 後 藤 桂 子

つかの間の日を全身に穴惑
鬼の子の生涯着の身着のままに
夫好む「立山」けふより温め酒
雁の棹夕日の空に伸び縮み
芒原風に獣の匂ひかな

金沢 豊 田 高 子

田廻りの先へ先へと稻雀

菱採りや暮色分け行く鹽舟
鮭遡るくろがねの背に疵つけて
胡弓の音川に映れる二日月
あかときや稻田の露の光り合ふ

金沢 松井佐枝子

発条の止まるやう蟬あふむけに
かなかなや溪流の岩みな仏
桐の木の下き風に鳴る盆切子
桐の実の音転げゆく不動坂
○草雲雀古刹に錆びし馬繫ぎ

金沢 石川純子

銀漢に飛機の点滅吸ひ込まる
破蓮の黙の影置く昼下がり
茸飯二階の夫に声をかけ
ふるさとや赤とんばうの増ゆるころ
スケボーのじぐざぐとゆく秋日影

金沢 河野尚子

露天湯に首をならべて夏惜しむ
紙魚走る夫の書籍を日に晒し
老いて語る当時の記憶原爆忌

売地札立ちて久しき狗尾草
茶屋街の簾掛け替へ風新し

内灘 塩井志津

霊峰の稜線しるき白露かな
大鯉の鰭のきらめき涼新た
笠雲の黒き遠嶺や稻びかり
朝顔展鉢に大きく園児の名
綾子句碑へ木の香さやけき橋渡る

七尾 谷渡末枝

自らを雁字搦めに穴惑
藍染めの陰干し小鳥の二羽三羽
月の土間狩の道具の一ト揃へ
秋耕や狐の嫁入り二度通る
秋草を簞いっぱいに手づくり屋

敦賀 石田野武男

星とぶや海へ逆落つ海女のみち
海女の村低き庇に瓢干す
○角伐られゐる鹿の目の人恋ふる
下手人は新婚の嫁村芝居
座敷牢のこる屋敷の障子貼る

白山の水にてつくる新豆腐

敦賀 倉谷紫龍

日盛りの鍾馗の剣や古庇
護符木札首に吊して滝行者
化粧仏洗ふ若狭の地藏盆
青棗老舗の宿の駒つなぎ
張板へ江戸小紋干す秋日和

敦賀 倉谷ます美

二胡奏づ芭蕉布を着て島娘
瀬田の月見むと紙燭の月見台
風穴へ新酒を寝かす三代目
後継のなき窯終ひ虫の闇
窯跡の甕墓あまた蚯蚓鳴く

敦賀 靄田勝子

踊り子の跳ねてこむらの見え隠れ
吊られたる木偶の目大き青棗
新豆腐戒壇めぐり終へし膳
月照の入水の海無月なる
猫の尾のふれてはじくる鳳仙花

徳島 福島吉美

貝殻の混じる石垣穴まどひ
張り替へし杉板匂ふ虫の夜
分譲の杭打たれみし刈田跡
猪垣に囲まれ暮らす兄夫婦
墓仕舞ふ跡地均せり秋の夕

徳島 村上和義

コロナ禍を晴らすが如く竹を伐る
帰郷して檀尻担ぐ村祭り
流燈の押し寄せて来る町の川
炭山の煙ひとすぢ鳥渡る
老僧の袈裟ずり落つる残暑かな

徳島 宮西修一

駅裏のシャッター街の残暑かな
おろおろと老犬の居る残暑かな
のつぺりのもへじのかかしいまいづこ
白粉花おさな馴染みは人の妻
秋の虹振り返る時消えてゐし

室戸 安岡みさき

ちちろ鳴く海見ゆる間へ客通す

波音に勝る虫の音岬の闇
いとど鳴く灯一つ夜の魚市場
○子の寝ておもちや箱より虫の声
数珠玉や志士刑場の水の辺に
見えかくれ海士の魂とも遠鯖火

高知 仙頭 宗峰

よさこいも自肅高知の夏は逝く
難聴の妻に風鈴低く吊る
○後足の叱られてゐる祭獅子
秋暑し淵の底まで日本晴
不動岩台風余波に身震ひす
台風来屋根の重石を点検す

長崎 丸本 祥夫

読み返す聖書に紅葉葉かな
黒人のラップ聞こゆる良夜かな
風切つて風になりたる秋燕
葛の花あをみてきたる湖水かな
稲妻や家中白くなりける

那覇 前田 貴美子
あらがふも馴染むも風の草の花

○投入の壺に芒の風立ちぬ
母遺す杖に祖母の名遠いなづま
台風裡板戸を漏るる仏間の灯
村芝居うしろ御嶽の闇深く

那覇 大湾 宗弘

雑貨屋の棚の鯖缶秋日差
巻き上げて空のあかるさ秋簾
竹の葉がきらきら秋のきつね雨
下水道工事現場の轡虫
稲妻に途絶えしラジオ深夜便

那覇 比嘉 半升

廃窯の焚き口崩れ草の花
赤土に打ち込む鋏や秋の風
行く雲や芒でつくる部屋簾
琉歌碑へ雨のしとどや破芭蕉
三線や海より上るけふの月

那覇 當間 シズ

書の文字のにはかに陰る秋落暉
秋蟬や厨に古りし油鍋
天の川逝きし人々懐かしき

石敢當に弾かれ転ぐ福木の実
吉屋チルの詠ひし川辺白芙蓉

那覇 中 本

いつせいに草の花咲くグスク道
秋風が磨く石づら火伏獅子
沖雲へ甘蔗の初穂の遅速かな
箸り食むむしりこぼせりたうもろこし
現実の壊れて消ゆる秋の虹

宜野湾 吳 屋 菜

○ 摩文仁の丘
夥しき死者の名曝し摩文仁炎ゆ

三句
摩文仁城跡

古城址や処暑の高倉影静か

幾秋を経し城門の楔石
護佐丸の居城やいまも蟬時雨
民具館の厨子甕に撥ぬ榕樹の実
読谷村や笹をこぼるる紅き薯

収容所：戦後県民の強制収容地
西 原

宮 城

甘かりし芒の若穂収容所
秋蟬の挽歌農林健児之塔
予報士の指す雲の渦厄日なり
夜永さの刻打ち終はる掛時計

清

々

勉

秋夕焼ニライへ向ける島の墓

豊見城 渡 真 利 真 澄

福木の実熟す日照雨は唐突に
福木の実熟れて老樹を明るうす
差し潮の川面の尖り台風来
鉄瓶の沸く二百二十日の昼餉
夏瘦せの母の座椅子に万華鏡

万象基金のご報告 (二口二千元)

三澤 治子 五〇〇口

(令和2年10月9日～10月22日・敬称略)

匿 名 五口

ご協力に感謝申し上げます。

小林 珠江 五口

「万象」発展のため、大切に
に使わせて頂きます。

海野 みち子 一五口

万象俳句会

新入会員のご紹介

永田 公香 (静岡)

同人作品の佳句

内海 良太

掌の窪のいろやかたちや草の種 岡本敬子

千草八千草というほど多くの草がある。種も大小、芥子粒より小さいものもある。掌の窪の種は可愛らしい花を咲かせた何種類かのものだろう。種をサラサラ揺らしながら万華鏡を見るように楽しんでるのである。読者も種の「色やかたち」を想像しながら楽しめる句だ。リズムもいい。

丸めたる反古ほどけゆく秋思かな 加藤季代

一見していい句だと思った。書き損じや役に立たなくなつた資料などを反古にすることが多いが、加藤さんが丸めて反古にしたのはどのようなものだろう。「秋思」の本意は「秋の頃、心に感じ思うこと」とあり、相応に推し量ればいい。

反古の描写が「ほどけゆく」で具体的、しかも余韻がある。

青柿の色づき初むる子規忌かな 名和政代

9月19日は子規忌。果実は色づき、秋の草花も出揃う頃である。子規が描いた青柿に色彩・形ともリアルな絵がある。

子規が彩色の絵を描き始めたのは、もう晩年の頃、手に握つた柿を初めて写生して虚子に見せたら分つてくれず、馬の肛門のようだといわれたと本人の日記に書いてある。

湧き水の流れゆるやか芋洗ふ 西本才子

見物する者にとつてはのどかな風景である。今でも門川のきれいな村の家々では石段の洗い場を設けている。

「芋洗ふ」のフレーズに、誰もが思い出す芭蕉の句がある。

芋洗ふ女西行ならば哥よまむ 芭蕉

作者もこの句を思い出しながら作つたのだろう。古典を踏まえた面白い句になった。

一つぐらゐ落ちてきさうな星月夜 三澤治子

三澤さんの住居は茅ヶ崎海岸に近い高台にある。

空気の澄んでいるところなので、月のない夜空には星が一杯零れるように見えるのだろう。天の川から星が一つぐらゐ落ちてきそうだと思つても不思議ではない。

口三味線風の盆とて繰り返す 若島久清

「風の盆」も今年中止となつてしまった。口三味線を繰り返す若島さんは八尾にお住まい。八尾では町内ごとに「越中おわら」の踊りを上演する。かなり前からの準備で、町は「越中おわら」一色となる。中止でがっかりするのは観光客ばかりではない。地元の連中が一番落胆しているのである。

後足の叱られてゐる祭獅子 仙頭宗峰

獅子舞もこの頃は人手不足になつていようだ。獅子舞の足役はただ歩くだけでなく、いろいろな芸をしなければならぬ。若者に代役を頼んだが、少しばかりの稽古では上手くいくはずがない。そして年寄りのコーチはきびしく叱咤する。「万象」にも後足の句があつた。この後足はベテランだろう。

水飲んでさて獅子舞のうしろ脚

大雪山連峰冬はじめ 岡本敬子

大雪山へ疲やみの秋をあとにして
索道を山霧上る速さかな
七いろの斑にもみつ原生林
ケーブルの終着駅は冬はじめ
マスクして鼻梁より貌痛みけり
ひと筋の光があれば黄葉紅葉
池澄める秀峰ひとつさかしまに
火のいろのもみち頂上のみ残し
跳び出せり耳さき黒き雪うさぎ
羽撃つもの捷し雪来るけはひかな



COVID-19の不思議な歲月。八か月近く籠り、マスクを着け、ひたすら手を洗った。恐るおそる句会と吟行をし、グータッチにささやかな日常が感動的なものである事を知った。

カミユの『ペスト』を読み「不条理なもの」が頭を巡った。

思い立って大雪山の大山塊へ日帰り旅をした。アイヌ名の神遊ぶ庭という連峰は不動。原生林もいきもの達もびくりともしていない。そのすこやかさ、したたかに圧倒された。

墓参り

柳澤宗正

草も木も黒ずんで来し残暑かな
縁日の取り止めとなり秋の風
遠富士に大きな笠雲野分晴
マンションの並ぶ川筋ゑのこ草
三塔の見ゆる入江や鰯飛び
夕映えの煉瓦の倉庫ちろ虫
通院の坂に喘ぐや秋の雨
伊代次句碑拭ひ終ふれば霧霽る
道標の文字なぞる子ら小鳥来る
群とんぼ仰ぎ伊代次の墓参り



私は横浜の十四階のマンション暮らしである。北に横浜駅、東に山下公園、西に富士山と大山等丹沢山塊を望む。今年はコロナ禍で旅行は控え、マスクを着用しての一、二時間の散歩を日課としている。信州の田舎育ちなのでビルに囲まれた都会生活だけでは退屈で息が詰まる。そこで、折に触れ田園の風景に親しみ、自然の懷に抱かれてリフレッシュしている。

それにしても今の生活は窮屈この上ない。コロナ禍の早期終息を願う所以である。

手に触れて水の冷たさ冬牡丹

冬牡丹は春と冬に咲く二季咲きの性質をもつ品種を冬に咲かせる。薬園いをして寒さを防いで人工的に咲かせた花である。掲句は平成二十七年四月号に掲載された句、思い切り省略を尽くした句になっている。作者は冬牡丹については何も語っていない。上五から中七の「手に触れて水の冷たさ」の調べで、読み手にさまざまな情景を託している。例えば、たまたま手に触れた水の冷たさに驚き、冬の深まりを感じ、あの冬牡丹は蕾を付けただろうか。いやもう咲いているかも知れないと、冬牡丹を思い浮かべ案じている。掲句はこの様な句意であろうかと、私なりに鑑賞しましたが、はたまた社寺の手水でしょうか。手に触れた水の冷たさに、より寒さを感じた作者の眼前には、厳しい寒さにも負けずに菰の中には大輪の冬牡丹が咲いていた。健気に咲いている冬牡丹に、作者は畏敬の念をいだき深く感動されたのでしょうか。

同時掲載句に「思はずも手に包みたり冬牡丹」の句があります。こちらの句は、あまりのいとおしさに我慢できずに、手で優しく包んでしまった。

どちらも、対象に対する作者の愛情と優しさがしみじみと感じられる、冬牡丹の句です。

(大山春江)

触るべきものにはあらず黒揚羽

圧倒的な存在感を持つ黒揚羽。揚羽蝶の中でも特に大きく色彩的にも目立っている。凛々しく神聖な感じさえるのは私だけではないはずだ。

蝶の命は短く、成虫になって二週間ほどと聞いている。また、蝶の翅は傷付いたら元に戻ることはない小学生の時に教えられた。素手で触ってはいけないのである。

作者はふわふわと飛ぶ黒揚羽に清らかで汚れのないものを感じ、短い命にも係わらず懸命に生きる蝶を見守っていたのではないだろうか。

「触るべきものにはあらず」に作者の優しさが表れており、読む側にも優しさが伝わってくる句となっている。そして、何も余分なことを言っていないのに深い句に仕立て上がっている。

いつかこのような句を詠みたいと思いつつもながらも勉強不足であることを痛感させられた。

私には毎年心待ちにしている揚羽蝶がいる。母が亡くなった時以降、お盆の迎え火を焚くとどこからか青筋揚羽が飛んできて、私に纏わりつくようになっていく。私は蝶に見守られているのかもしれない。

(加山ひさ子)

風船に百歳の息吹き込みぬ せいぎ

掲句は、『天蓋』に次ぐ第六句集『虎の陶枕』所収。平成16年より平成19年までの四年間の三百句が収まる。句集名の『虎の陶枕』は、せいぎ氏が蒐集している骨董の中でも心に残るもので、氏の生年の寅年にちなんでつけたものだという。

また、せいぎ氏は「なると」を主宰なさり、「明るく生き生きとした俳句づくり」を目指しておいでだ。

掲句の成功は、「風船」と「百歳の息」の取合せの妙であり、また、「百歳の息」だと考えれば「紙風船」とはつきりしてくる。息を吹き込んでいるのは、百歳の女性であろうと想像する。紙風船へ百年を生きてきた含蓄のある息を、多分、楽し気に吹き込んでいたのであろう。そこは、堂縁であろうか、境内であろうか、はたまた露店であろうか。今年も敬老の日が近づき、新聞に百歳以上の氏名が掲載されたが、九分九厘が女性であった。

掲句にせいぎ氏の注釈があった。「長寿社会になった。百歳も珍しくはない。導師を勤めた人の中で百歳以上は七名。すべて女性である」と。

春の明るい日差しの中、風船に息を吹き込む百歳を、温かな眼差しで追っているせいぎ氏の姿が見えてくる。

(大村峰子)

明易し攻め焚きに壺透きとほる 恵子

句集『冬芽』所収。「益子・生井慶子さんのこふし窯 八句」の内の一句。生井慶子さんは昭和9年栃木県生まれ。長い闘病生活の中で、不滅なるものへの憧れから、焼き物に心惹かれて陶工になりたいと、画家から陶芸家に転身した福原達郎氏に師事。

一方、俳句は昭和47年「風」入会。同58年「風」同人。「万象」の創刊同人である。

作者とは「風」「万象」を通じて親交を深めておられた仲である。この句の平成3年当時、生井慶子さんは50代半ばで、陶芸家として脂の乗った頃である。一昼夜をかけて行われる窯焚きの手伝いに行かれた時の作であらう。二人の親交の深さがうかがえる。

陶器を焼く窯は内部が1300〜1500度にも達し、焼成時間は、一日から数週間だという。夜通し焚き続け一気に1300度上げる「攻め焚き」。この句には現場でないといつかめない即物具象が生きている。「壺透きとほる」という実景の捉えどころが、ピシッと決まっている。あっさりとして季語「明易し」を良く活かしている。

沢木欣一先生のしっかりとものを捉える即物具象の教えがこの句の骨組みとなっている。

(安岡みさき)

「俳句」9月号より

三澤治子句集

「花梯梧」

故人との心の交流



令和2・5・21
定価：2700円〈税別〉

三澤治子氏は大正十三年生まれで、「万象」同人。「花梯梧」は第一句集。序文を内海良太主宰が書いている。

母たき氏、妹いつ子氏も俳人で、母子三人で仲睦まじく俳句に親しんできたという。九十六年の長い人生を経て、過去の人との深い心の交流があるのであろう、句碑や墓所を詠んだ句が多く見られる。

河童句碑遠野桜の影置けば

遠野にはかつての師、沢木欣一の句碑がある。

初雪をもて拭ひたる伊代次句碑

「伊代次」は「万象」元主宰の滝沢伊代次。

ふる里の墓は青嶺へつづきをり

著者はこの間に母、妹を亡くして、その愛惜の句には心を打たれるものがあつた。

五月晴れ花に埋もれて母逝きぬ

郭公のこだま途切れず父母の墓

母逝きし日より余白の古日記

花冷の雨雪となり妹逝く

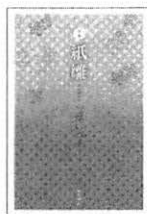
豆飯や今日も笑つてゐる遺影

鈴木牛後が評する角川書店の新刊

三澤いつ子句集

「紙雛」

即物具象の成果



令和2・5・21
定価：2700円〈税別〉

三澤いつ子氏は昭和三年生まれで、「万象」同人。平成三十年逝去。「紙雛」は遺句集で、姉治子氏の発案で纏められたと内海良太主宰の序文にある。

本句集は治子氏の「花梯梧」と同じデザインの瀟洒な函入り本で、二冊並ぶとまるで姉妹が仲良く寄り添っているようにも見え、あたたかな気持ちになる。

母の名を記して海へ紙雛

句集名のもとになった句である。和歌山・淡嶋神社に

て、母の息災を願って作つたという。著者は治子氏と同様、母に対する親愛の情をたびたび詠んでいる。

虫の夜母へ小窓を開きおく

臥す母の部屋に小さき内裏雛

序文によれば、著者は母、姉と同じ結社に所属し、師から即物具象による写生をじっくりと学んだという。その成果も本句集にしっかりと収められている。

枯蟪蛄腹の草色残りたる

大藁屋太き氷柱へ月あかり

飛魚高く跳んで散らせり海の紺

晩学 今越みち子

昨年、句集『息吹』を出された作者。普段の生活をありのままに詠んだ作品からは、心豊かな暮らしぶりが思われる。

晩学のまなこ休まず薔薇の花

句集の中に「年を重ねても新しい時事や言葉も詠んでいて驚く」とお嬢さんの真紀子さんの言葉が。好奇心いっぱい作者は日頃から学びの姿勢を大切にされているのだと思う。疲れた目を癒してくれるのは庭に咲く大輪の薔薇の花。

花菖蒲茶筌の音の軽やかに

金沢は百万石の城下町、お茶会も多いのでしょう。「音の軽やか」にお抹茶の泡立ちが見えてくる。居住まいを正していただく一服のお薄は安らぎのひとつである。茶席に菖蒲の花が一本活けられていた。

九頭竜川の腹の黄著き鮎貰ふ

鮎釣りが解禁され、九頭竜川の鮎が届いた。「腹の黄著き」からは、若く張りのある鮎の姿が見える。

梅雨籠りブラックベリー煮ることも

雨の日はジャムを煮る甘い香りが厨に満ちている。

純子忌や供華に黄の濃き唐菖蒲

純子先生を偲んだひと日。遺影の前に供えられたグラジオラスの黄色が明るい。まっすぐの茎から豊かに花が開いている。「黄の濃き」には師へ寄せる作者の深い思いが込められているように感じる。

新宿西口界限 藤田裕子

超高層ビルのオフィス街と青梅街道の残る新宿西口界限。新しいものと古いもののある面白い街を詠んだ作品。

ここよりは青梅街道橡の花

江戸城建築用の石灰を運ぶために開かれた青梅街道。新宿追分が起点であった。街道に咲きはじめた橡の花。キャンドルのような穂を立てている花は遠目にも印象的である。

托鉢僧鉦打つ右の日焼けの手

都心の高層ビル街に立つ托鉢僧が意外である。鉦を打ちながら経を唱えていても、深く被っている編笠に表情はうかがえない。作者は僧の手に焦点を当てて、強い日差しの中、路上に立ち続けている托鉢の姿を詠んだ。

路地奥にしもたや二軒枇杷たわわ

寂れてしまった街道筋。熟れた枇杷の実が路地に明るい。

青梅雨や四十二階にゴッホの絵

四十二階という目の眩むような高さが、この街を象徴している。作者は雨の中を来てゴッホの「ひまわり」と向き合っている。「青梅雨」は雨に濡れた木々の緑が感じられる季語。「ゴッホの絵」との取り合せて絶妙な対比が生まれた。

夕立叩く都庁広場の石だたみ

大粒の雨が石畳を叩きつけるように降り出してきた。夕立なら「叩く」は不要と思う。また字余りの調べは夕立の激しさを緩めてしまうのでは。

同人作品評（十月号）

林 陽 子

蚕豆の過保護のわたしに三粒ほど 加藤季代

未熟の莢が空に向けて直立するので、空豆という。

沢木欣一先生の句へそらまめの葉裏空色招提寺で葉の裏も又、そら色だと知った。小粒な豆が三つ、多くのわたしに守られている様を「過保護のわたしに三粒ほど」と表現した作者は、その小さな豆の中に生命の輝きをみたものでは。大事に育てられた蚕豆の美味しさも伝わってくる。北海道では、市場にあまり出回らなく、手に入りにくい蚕豆。因みに、旅先でいただいた蚕豆は「まことに青き味したり」でした。

箎いっぱいキャベツを刻む愉しさよ 山口素基

箎に山盛りのキャベツの千切り。無言で黙々とキャベツを刻む作者、絵になります。視覚だけでなく聴覚、味覚、皮膚感覚をも刺激してくれる句。作者は男性なので台所仕事を協力しただけ？ それとも料理がお好きで上手な方なのでしょうか。下五に「愉しさよ」とあるのできつと後者なのでは。想像がふくらみます。「男子厨房に入るべし」ですね。

長椅子の湿りの残る蓮見かな 中嶋久登

蓮見とは、夜の明けきらぬ頃、蓮が開花するその瞬間を見

に行くこと、又そのために仕立てた舟を蓮見舟と呼ぶ。

蓮は水面に長い茎を出し、先端に良い香りのする淡紅や白などの大輪の美しい花を開く。それを鑑賞する為、作者は暗いうちに起きて出掛けたのだ。「長椅子の」とあるので舟ではなく池の辺での蓮見。夜露に濡れていたのか、池の水がかかった椅子だったのか、「湿りの残る」と表現。

花を語らずとも美しい蓮池の景色が見えてくる。

雨粒を繋ぐ蜘蛛の囲華やげり 山下良江

蜘蛛は無気味で好きではないが、水の玉をいっぱいに散りばめて白く光る蜘蛛の巣は美しい。その蜘蛛の巣の状態を「雨粒を繋ぐ」と詠んだ。一見抽象的だが、現場をじつとよく見ているうちに出てきた言葉なのだろう。正に、細見綾子先生のお言葉「俳句は日本の言葉との出会いである」です。ボエムがあり、美しい蜘蛛の囲の一句になりました。

触るる手に青さ匂へり大茅の輪 藤田裕子

毎年六月晦日、夏越の祓の時、参詣人は茅を束ね大きな輪の形にした茅の輪を、三回くぐって無病息災、厄除けの祓いとする。神事に緊張したのか、大きな茅の輪に手を添えてしまった作者。潜り終え、はじめて手に残る匂いに気付く。

茅萱の青い匂いは、厄除けの済んだ作者の清しい気持を表しているようにも思える。句の上の表現ではなく句の奥に秘められた表現が深みを感じさせてくれる余情のある句。

索麵ぞ庭かきわけて茗荷の子 加賀葉子

「索麵ぞ」の「ぞ」は一つの事柄を特に指定し強調する。

お昼は何にしようかと幾つかメニューを考えた結果、索麵に決定。そうと決まったら薬味は庭の茗荷だ。茗荷の花が咲いている庭、最高です。「茗荷の子」は、茗荷の若い花穂の事。これが美味しい。「庭かきわけて」とあるので広いお庭に色々栽培されているのですね。日常の出来事を自分の言葉で具体的に表現。五、七、五のリズムがとても心地良い一句。

薔薇の枝へくそかづらにとらはる 榎本文代

「灸花」は内面が紅紫色の小さな鐘状の花を付ける。逆さに置いた形を灸をすえる時の艾の形に見立てた名。悪臭があり「屁糞葛」の字もある。蔓性で木に纏わったり生垣を這ったりする。大切に育てた薔薇に灸花の蔓がまきついた様を「へくそかづらにとらはる」と表現。心底俳句を楽しんでいらつしやる作者ならではの、実景を描写した俳諧味のある句。

飲み薬一つ増えたり花南天 新妻奎子

高齢化社会と言われて久しい。このコロナ禍においても、高齢者は特に注意が必要らしい。私もその一人だが加齢は待ってくれない。掲句を見ると、作者は通院して何らかの薬を飲んでいらつしやる様子。「増えたり」により、増えた一錠の薬を見つめ深い溜息、作者の重い心の内を表現。しかし、自

然に目をやると、小さな白い花を沢山つけた南天。季語の「花南天」で、花を見てほっとしている作者の笑顔も見えてくる、明るい一句に変わりました。

自然の彩りや実りは人に安らぎを与え癒してくれます。

知床の海へ真つ直ぐ大瀑布 吉野美智子

平明で一読して解る。臨場感のあるダイナミックな景が見えてくる句。知床の群青の海へまっすぐ落ちる滝は、まるで真つ青な空の一点より落ちてくるようだ。水原秋櫻子の〈滝落ちて群青世界とどろけり〉を連想させる。遊覧船から見る知床半島は絶景です。同時掲載句を見ると、心ゆくまで世界自然遺産知床の夏を満喫した様子が窺える。

炎昼や菓子器に満たす塩の飴 福島吉美

「万象」八月号の「コロナ禍の中で」に、夫君せいぎ氏が「楽しい句会」という文章を書かれている。「なると」句会では毎回吉美さんの手作り料理と菓子が並ぶとか。今月はいなり寿司、干柿、かしわ餅、山盛りのそら豆だったという。何と羨ましい。本当に楽しい句会なのですね。以前、せいぎ氏が「俳句は楽しいものでなければならぬ」と書かれていた。燃えるように暑い昼下がり、句会の準備をする作者。まず塩飴で菓子器をいっぱいにした。今年の夏は暑い。水分と塩分が欠かせない。季語の「炎昼」により日常のさりげない出来事を俳句として成立させた。

生きる力の漲る句集

「蕉風」を読んで―

福島 せいぎ

山田春生さんの第十句集『蕉風』は、春生さん八十三歳から八十八歳までの作品四百七十四句が収録されている。

人生八十年時代から、現在は人生百年を目指す時代になったが、男子の平均寿命八十一歳、健康寿命七十一歳から考えると、八十八歳の米寿を健康で迎えられることは、まことにめでたいことである。

八十代になると、感性、判断力、記憶力、集中力などすべてが衰えてくる。「俳句は感動の文学である」と分かっているも、老化現象と病氣は防ぎようがない。

ところが、春生さんの句集を拝見すると、そのような不安はどこかへ飛んでしまう。紺青色の表紙に、大きく「蕉風」の二字をあしらった句集。帯文には「俳句を楽しみ、老いやコロナ禍にくじけず、生き永らえ、米寿を区切りにしてなお生きんとする長寿の作品集」のタイトルに、春生さんの人生観を窺うことができる。

句集を出版することは、大変なエネルギーが要る。時間もお金もかかる。春生さんのように、今まで一度も病氣にかかったこともなく、健康で、大好きな俳句を心ゆくまで楽しみ、編集から装丁に至るまで、ご自身の手で納得のゆく句集を出されたことは稀有なことである。

米寿には句集を出さん月今宵
春よ来い早く来いわが米寿の日

米寿よと妻とことほぐ花見酒

令和二年三月十八日の誕生日を一つの目標に生きてこれた春生さんにとって、米寿はうれしい通過点であった。「あながき」には「老いを意識したことはあつたが、年を取ったなあ、と思ったことはない。」と言っている。

野に遊ぶ米寿の春生と申します

米寿まで元気で生きることができた昭和一桁生まれの益荒男春生さんの本心が吐露されている。少年時代から戦争に明け暮れた時代を経て、いつしか米寿を迎えた一人の男の遊行、自在の境地から生まれた悟達の一句である。

句集から、私の好みの句を任意に鑑賞してみよう。

げんげんの道つづくなり極楽寺

春生さんの「げんげ」の句は、すでに『風歳時記』に載っている（げんげ咲く裏返りたる土くれに）があるが、掲句は、げんげの花が咲き乱れている春の極楽寺の景色をゆつたりと詠んでいる。げんげの花が咲く道の行手に、極楽があるかのような思いがする。

かつて、句集『極楽』の中で（野蒜摘み極楽といふ寺めざ

す」と詠まれているが、春生さんにとつて極楽浄土は欣求の地であつたに違いない。

見回りの貫主はほほ笑む牡丹の芽

この句のモデルは、高幡不動尊貫主の川澄祐勝大僧正である。私と同じ真言宗の僧で「春耕」の重鎮として知られていた。ありし日の祐勝僧正が境内を歩かれていた姿が浮かぶ。私にとつても目標にしていた立派な僧正様であつた。

天上の師と語りたき小春日よ

欣一綾子しきりに恋し冬銀河

「天上の師」は「春耕」元主宰の皆川盤水先生追憶の句である。〈酒好きの先師恋しや年忘れ〉〈居酒屋の先師の席や薬喰〉も盤水先生を偲んでの作。

私と春生さんとは、「万象」の大会ではいつも同じテーブルである。日本酒をおいしそうに召しあがる。下戸の私にはうらやましい限りだが、師弟で酒を酌み交わしているお二人の声が聞こえてくる。

師と言えば、春生さんにとつては沢木欣一先生であり、綾子先生であつた。句集『極楽』の中で、「幼いころ母を亡くした私には、先生は母のような存在であつた。先生追慕の心をこめて句集を編んだ。」と述べている。

山晴れや頬を寄せあふ春の鹿

あたたかや岩場に狼の抱きあへる

薔薇供へ象のはな子の遺影展

春生俳句の特徴は、有季定型に則った即物具象にある。欣一先生の教えの、写生の奥にある「物の本質」を把握してい

る。春生さんの輝かしい俳優や多くの著作から見ても、「風」の本流を歩んで来られたことは万人の認めるところである。

春の鹿への優しいまなざし。亡くなった象への思い。ことに、岩場に抱き合っている猿への哀憐の情は、芭蕉『猿蓑』巻頭の句〈初しぐれ猿も小蓑をほしげなり〉に通じるものがあつて心打たれる。

月涼し妻の酌にて酔つばらふ

湯豆腐や病後の妻も起きて来て

春の夜や長寿の妻と食べくらべ

夫唱婦随（いや婦唱夫随かも）のあたたかいご家庭の雰囲気が出てくる。お二人のご長寿をお喜びしたい。

老も死もこはくはないぞ玉子酒

百までは生きん爛酒熱うせよ

柿若葉父は百まで生きたるぞ

百までは生きたまへよと汗の僧

百歳までは生き抜こうとする春生さんの強い意志が表われている。二年後の卒寿と九十九歳の白寿に句集を出したいと願われているが、「万象」の後輩たちも、その日が来るのを楽しみにしている。

薫風や昭和も遠くなりたるよ

昭和、平成、令和と三代の御代を生き抜いて来た感慨の一句だが、この句集名にも由来する。春生さんらしい豪放な表現が昭和への思いと重なっている。

この句集は、コロナ禍で落ち込んでいた私に、生きる力と喜びを与えて下さったことを感謝している。

白 砂 踏 む

謝 花 寛 営 (那覇)



天金の褪せたる詩編梯梧散る
殉教の墓へ案内や草いきれ
草分けて殉教墓へ夕立過ぐ
御言葉へ涼しき波や白砂踏む
脳波図を乱せる風や敗戦忌
山羊小屋へ秋草はこぶ朝かな
十字架を握るやさしさ草の花
遺影拭く母の繰言盆用意

日焼の子 ―亡き弟へ―

砂 地 宏 子 (武蔵野)



眼裏に君の生まれし日の夕焼
砂の城昼餉忘るる日焼の子
波乗りの岬の高き低きかな
母の手を握りしむる子土用波
八月の八日生まれ君なりき
星一つ探してゐたり秋七日
コスモスや君と娘の散歩道
主なき小庭に積もる柿落葉

万葉ノオト



テーマ「つぼ」

玄関の片隅で

横浜 大駒泰子

私の母は晩年を我家で一緒に暮らしました。思い出深い品々を処分して持参した物の中に大きな陶器の壺がありました。六畳の母の部屋に置くには邪魔になり押入れの奥に仕舞われました。由緒由来は聞かずじまいでした。

母が亡くなり遺品の整理では、貰い手もなく処分も考えましたが、ふと思いつきました。玄関の何の変哲もない金属の傘立の代りでした。

高さ三十八センチ胴回り九十センチ岩のような地味な色合、手触りはざらざら、前面は一部ゆがみ釉薬が流れるようにかけてあります。両肩には手捻

り然とした耳がついています。口は広く傘が八本は優に入ります。

壺が壺に嵌って二十九年が経ちました。行く末は子供達に任せましょう。

「涙壺」の話

横浜 小坂橋泰山

有田焼などの陶磁器に興味を持ち、調べていた際、涙壺（なみだつぼ）の話を知ることになった。古代ローマにおいては、死者の恋人や家族が葬儀の時に流した涙をこの壺に溜めて副葬品にしたと伝えられている。中東のイランでも、涙壺があり、戦争に行った夫を待つ女がその涙を溜めたという。英国のビクトリア朝時代には、涙壺に美しい裝飾が施された。愛する人を失った悲しみの涙を入れて、涙が蒸発すると、喪に服する期間が終了したと伝えられている。千六百年代に有田で焼かれた壺がモチーフになって造られたという。最近、有田焼の窯元が小さな白磁の涙壺を作っていることを知って、有田焼の皿と一緒に瓢箪型の小さな涙壺を購

入した。涙は溜めず、一輪挿しとして花を楽しんでいる。

仁清の壺

小松島 田上幸子

壺といえば野々村仁清、江戸時代前期の京焼の陶工で「色絵藤花文茶壺」（国宝）は殊に有名である。

思えば五十数年前、田舎の高校から修学旅行で東京上野の国立博物館へ行った。展示物が多く、この壺は確かに見たはずだが全く記憶にない。しかしお土産に買った絵葉書だけは残っている。若い頃は陶器などに全然興味が無く猫に小判の勿体ない見学であった。

最近主人の好きな「お宝鑑定団」を見ていて仁清の壺が出てきた。あら、よく似たのを見た、と言いかけた言葉を読み込んだ。すごいお値段に驚愕した。贋作も多く出回っているとか。

美しい藤房の揺れる季節になると、この壺を思い出す。コ罗纳が収まれば東京へ行ってみたが、今は静岡県県のMOA美術館にあるらしい。

お茶壺

静岡 内藤允昭

静岡市の北部、井川の大日峠（150㍎）に「お茶壺屋敷」と呼ばれる小屋がある。『修訂駿河国新風土記』に「家康公駿府御在城の時この峰にお茶小屋を建て、茶を壺に詰め、此の所に置く。」と記されているように、小屋には大御所のお茶が天下の名器と言われる茶壺に納められ、保存されていた。高冷地であるため、新茶の時期に壺に詰められた茶葉は、秋の口切の頃まで熟成され、駿府で家康公に供された。現在も春には「茶詰めの儀」が、秋には、茶壺屋敷から「お茶壺道中行列」で山を下り、茶壺を開封する「口切りの儀」が久能山東照宮で執り行われている。

万象同人、大村峰子さんの地元井川の句会名は「井川お茶壺句会」である。

つぼ

長崎 永田美知子

家にはいつの頃かわからない位前か

ら、梅干作り専用の「つぼ」がある。その壺には、祖母や叔母が梅を漬けていたが、母が漬けている姿の記憶がない。それに母が食べている姿もない。きつと母は梅干が嫌いだつたのだろう。壺の蓋を開ける時は、父の朝食の時だけだった。

祖母も伯母も亡くなり、梅干の入った壺は初めて空となった。いつもと違う「つぼ」が何だか寂しげに悲しそうに見えた。

そして、私が初めて梅干を漬けた時、壺は満足そうに輝いて見えた。それから歳を重ねる度に漬けたが、今は父も母も亡くなり、梅干の入った「つぼ」は、眠ったように台所の隅にある。蓋を開ける者は誰もいない。私が開けることもない、私は梅干が嫌いだから。

水飴の壺

佐倉 鈴木隆久

私がまだ幼い頃、体が弱く腸チフスに罹った時の話です。

当時は食糧事情は悪く薬の効果も少

なく、一時は医者から見放されるほどの病状でした。そこで、両親が目をつけたのが水飴でした。朝晩に生姜湯に少量の水飴を入れ溶かしたものを飲むと、体を温めると共に滋養をとることで病弱な体を改造させようとしたそうです。母から聞いた話によると、何時ももつと欲しがり、暴れたそうです。

母が留守の時、台所の棚から水飴の壺を取り出し、一心不乱に舐める事件が起きました。大量に食べるのは危険と医者から注意されていたのに、沢山舐め尽したので、慌てて入院し、九死に一生を得て、無事退院できました。それ以来「壺には手を出すな」と何かある度に言われた事を思い出します。

「万象ノオト」投稿募集

▽4月号「鏡」 (12月末日締切)

▽5月号「砂浜」 (1月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

〒194-0041 東京都町田市玉川学園

3-10-19 桔梗 純

俳書探訪

古川京子

「なると」(九月号)・創刊四十五周年記念号(通巻四八八号)師系「風」。主宰福島せいぎ(前「万象」同人会会長)

昭和五十年九月、森龍子が創刊。平成元年に〇明るく生き生きとした俳句づくり〇楽しい生きがいのある仲間づくり〇伝統俳句に根ざした自然観俳句づくり、を目標にせいぎ氏が二代目の主宰に。この度、四十五周年を機に、人間の普遍的な三つの理想「真・善・美」が目標に加えられた。

(主宰の挨拶文より)

四十五周年記念同人作品より(49名が1頁に10句を掲載)

阿波絵師の無縁の墓を洗ひけり	福島せいぎ
掛乞の賸物褒めて帰りけり	同
初春や木偶の袂の鶴と亀	福島吉美
夕間暮れ鐘を飛び出す蚊喰鳥	同
朝寒や大屯山に鳶一羽	磯田硯涯
野焼あと水いきいきと走りをり	岡田あゆみ
千大根よじれに旨みとじ込めり	嘉見キヨ子
帰省子の先づ星空を讃へをり	白川剛久
藍を刈る讃岐山脈真向ひに	浜野桃華
海開き駅舎無き駅人あふる	福原和代
冬晴れや藍の館の大かまど	保木文代
遠泳のしんがりに振る大漁旗	村上和義

せいぎ氏が連載する「狸の燭台」と「古玩愛腹」、前者は三百九回、後者は二百一回続いている。

狸の燭台 李登輝總統の死より

李氏の経歴を紹介後「一九九八年に台湾の旅をまとめた第一句集『台湾優遊』を出版し、李登輝さんに読んで戴きたくて手紙を添えて進呈した。思いがけず公文書の返書を戴き、今ではそれが家宝となっている。」(抜粋)

なると集(せいぎ選)より

凡戦が延長戦に西日射す	長山敦彦
鉛筆を削るまなざし青トマト	木内マヤ
座礁船父母の名を呼ぶ夜光虫	平岡功
分蘖やまだやはらかき蛇の衣	吉田幸代
近寄ればさざめくごとき金魚の子	張野孝子
セミのこえ一ばんのりでぼくきいた	(小)やまもとほるつぐ

「万象」主宰内海良太が(記念樹の今は大樹の茂りかな)と詠み、「俳誌の」継続の共通点は主宰の俳句文芸に対する熱い志と人格を基にした同人会員との信頼関係にある」と祝辞を寄せている。

表紙の、逆白波を飲み込む鳴門の渦潮の鮮やかな写真が「なると」の今の勢いを想わせる。

「なると」創刊四十五周年、おめでとうございます。

(筆者住所 〒277-0083 柏市日立台二一四一二)

中^{なか}鉢^{はち}弘^{こう} 一^{いち} (札幌)

巻頭作家(十一月号)プロフィール



中鉢弘一さん。八月号の新人賞に続いて十一月号の巻頭である。大きな虹のような二重丸を頂いた想いである。

巻頭作品は次の四句。

凍裂の跡が住み家や蟻の群
雨あとの森に艶なす蜥蜴かな
夏つばめ戻るも今は廃校舎
青芒分けて小川の沼に入る

コロナ禍で電話やファックスだけの句会続きの後、やっと西岡水源地へ一年ぶりで吟行に出かけた折の句が中心だ。凍裂でぱっくり割れながら青々と茂る樹や草や花々、生き物たちの姿に力を得たその日の感動を、選者の飛高先生が受けとめ掬いとして下さった。

弘一さんは室蘭市の生まれ。四歳で

オホーツク管内の津別町へ移り、そこで成長して津別町役場に職を得た。最後の十年間は教育委員会の教育長という重責を果たされた。仕事の傍ら向学の志やみがたく、十二年あまりをかけて通信教育で、武蔵野美術大学と玉川大学に於いて教職課程と博物館学芸員コースを学ばれた。仕事と学業の二足の草鞋はご苦労なさったと思うが、氏の人となりと思うと、その幾年かが「知る喜びと新しい挑戦」に満ちた充足の日々であつたに違いない。

仕事上の一番の思い出は「職員として出向した森の健康館ホテルフォレストの支配人の時代と十年間の教育長の時代」と答えておられる。今、句会のまとめ役を楽しそうにして下さる姿からも、地域の人々とのかわりや、先生たち、子供たちから愛され慕われたことが想像される。

弘一さんは絵描きさんである。十一年前の入会の頃、私が庭の石路の花を

句会へ手折って行くと、同伴でいらした常子夫人と持ち帰り、ほどなくして一幅の清らかな石路の水彩画が、白い額縁におさまり届けられた。

オホーツク美術協会員として展覧会に作品を出品なさり、道立帯広美術館や、札幌へ移られてからは札幌市の文化芸術検討会の委員なども務められた。今は民生委員・児童委員として、お年寄りや子供たちの身近におられる。

九州出身で、長年心理カウンセラーとして人々の心に向き合われた夫人との出会いは、雑誌の「ペンフレンド」であるというのほほえましい。氏はいつも人の輪の中にあつて、何の苦もなげに仕事を買って出て下さる。七十歳。

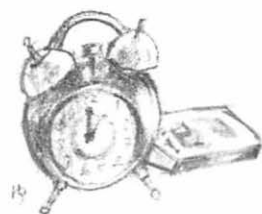
オホーツクの荒々しい大自然に取材した句と、お人柄が生み出すやさしく詩情のある、そして、色彩感の豊かな句はこれからである。

楽しみにしたい。

(岡本敬子)

万象作品

飛高隆夫選



台風裡白き燈しへヨハネ傳 那覇 謝花寛営

出窓より珈琲の香や蔦もみぢ

真直ぐに礼拝堂へ秋の風

揚花火一人遊びの子に遠く

空高し木場の水路の縦横に 横浜 小板橋泰山

底紅に日照雨のあとの日差かな

波寄せて貝殻鳴らす良夜かな

鯖雲や沖に耀ふ油槽船

すぐそこの海へ走れぬ熱砂かな 大和 中谷由郁

乱調の風鈴ひびく闇の夜

日の暮れて残る暑さのセピア色

夏の果てかすかに見ゆる土星の輪

心身に戻る力や今朝の秋 調布 大林彬彦

母の忌や庭に鳴きつぐちちろ虫

多摩川の太き蛇行や初紅葉

栗食むや憶良に負けず子煩悩

ローカル線フェンスに盛る葛の花 茅ヶ崎 久保田富士子

涼見つけとんばうホバリング

川風に笹のざわめき秋の色

オンラインはらから集ふ魂祭

青鷺の大きいなる弧の着地点 武蔵野 砂地宏子

少年の白き指先蟬生る

初秋の風の運べる胡弓の音

鎮まれる青磁の壺や秋暑し

飲みさしのストロー残る街晩夏 佐介 鈴木隆久

券売機の故障の窓に汗の顔

雲見下し一万尺の夏料理

原爆忌七十余年川清し

登高や遙かな街に雲間の日 大阪 入山繁幸

紙焼けの母の遺歌集秋彼岸

父に酒母におはぎの墓参り

行けば止み去れば再び昼の虫

隠沼に湧き上がりたる赤とんぼ 松田 古谷悠紀子

稲妻の続けざまなり山の尾根

七七忌墓を離れぬ黒揚羽

赤シャツの闇夜の案山子笑ひけり

水を打ち月命日の僧を待つ 新潟 佐藤幸示

甚平の父そはそはと孫を待つ

秋虹を背に老犬と老夫婦

海岸の家族を包む大夕焼

耳元にそよぐ夜風が秋運ぶ 札幌 石田 陸

海風に揺るる鬼百合たくましく

秋晴の日高の山に続く道

龍神に峡の湧き水涼新た

新じやがを黒土の香と掘り起こす

後れ毛の頬に張り付く残暑かな

夏瘦せもせで籠り居りコロナの世

夜ごと太る月も疎まし熱帯夜

虫すだく季節は地面這うて来る

新盆や提灯の位置定まらず

菊酒を好みし祖父の笑顔かな

夏瘦せの師の歩に合はせ木陰道

墓碑銘の朱文字目に沁む身にぞ入む

日高線廃線まぢか白木槿

地平まで白き波打つ蕎麦の花

写経帳にまぶしき日差し秋彼岸

草虱いくども払ひ巡拝す

椅子堅き留萌の駅や刈田風

境内の出入り見守る濃紫陽花

えぞりすに素早さの増す厄日かな

島崎 洋

園田 鶴子

高山 誓英

竹重 富子

佐々木 茂

北浦 詩子

草原はただ風の音虫の声

南溟に沈み螢に身をかへて 札幌 田邊政代

夜に散る薔薇はかをりを風にのせ

紅の色あらはれ吾木香と知り

山稜を藍に色変へ秋夕焼 中鉢弘一

細波に乗りて鴨寄る萩の岸

空砲の森に木霊や敗戦忌

秋空を鋭く突けり利尻岳 藤原善明

秋蝶に見晴台まで導かれ

秋出水濁り渦巻く天塩川 江別 太田佳美

初鮠ちやんちやん焼きに婿の笑み

蜻蛉来るつかまり立ちの赤児へと

日もすがら納戸を放つ秋日和 東根 門脇好子

大鎌切猿羽根参道横切れり

編笠の紅緒きりりと風の盆

柿若葉水車の音の途切れなく

六地藏前かけほつれ鰯雲 新潟 齋藤 信

秋澄むや老杉多き男坂

芸妓舞ふ形見の帯に秋扇

今日の秋大佐渡小佐渡浮く如し

榊原キヨ子

今朝の秋波おだやかに帰港船

梅干して微睡む午後の一時を

せせらぎの音のしじまのつくつくし 新潟 高野松風

栃の実のひとつ手擦れの艶めける

秋の風撞木の紐の褪せにけり 中塚滋子

初秋の雲の流れを見て飽かず

風鈴の風の気ままや乱れ打ち

それぞれの歴史の巨木寺の秋

徒長枝の揺れの止まざる厄日前 黒 渡辺志ま

間引どき菜のそれぞれに露の玉

枝先にはじまる漆初紅葉 宇都宮 安久都 登

庭園に芒のゆるる無言館

新そばの墨書あざやか信濃茶屋

花束のコスモス見せる登校児

悠然と仁王門出る大やんま 福田 弘

稲妻の走る下野国府跡

柚子坊の食ひ上りたる枝つ先

空蟬を掌に持ちきれずハンカチに 芳賀 稲川清子

秋の日の遠き列車の汽笛かな

屋根の上巡り巡りて帰燕かな

鐘つきて逃れる子等が萩ゆらす
草を刈る老いの揃ひの野良着かな
強風にざわめき立てり稲の波
竹林の良き音貫ひ夕涼し
上々の出来と見上ぐる松手入
稲刈に一日鷺の付きまとふ
こほろぎの鳴き声聴きて仕舞風呂
公園に萩の植ゑ込み隠れん坊
店先に女郎花活けおもてなし
朝顔の花を数ふる婆と稚児
木道に秋めく風の尾瀬ヶ原
暁に発つ白鷺の羽根眩し
抽きん出る樟の神木秋高し
菩提寺の庭の静けさ秋の蝶
庭広き武州の農家小豆干す
短冊の幼き文字や星祭
送り火の煙ゆつくり夕の空
牛の背の蜻蛉の眼くるくると
白山風露風のやさしき霧ヶ峰
八月や記録映像次々と

北井茂子

福武幸子

塙 テル

上野恭子

飯塚キミ

荒川 進

飯塚満里子

沼萱の刈られし茎の白さかな
掌の中を蹴飛ばしてゐる蝗かな
置鉤を仕掛くる川の月明り
置鉤に鰻暴るる夜明けかな
下校子の指に止まりし秋茜
緋カンナや空き家の門の固く閉づ
烏瓜の花はふんはり闇に浮く
湯に浸り無となる夜半の虫時雨
迎へ盆の写真を入るる便りかな
コンピニの更地となりて秋茜
桐下駄の鼻緒のゆるぶ秋暑かな
秋蟬をとほくに聞きて庭を掃く
新蕎麦や三百年の松仰ぐ
石榴の実正造旧居の裏庭に
噴水の中に遊ぶ子声高く
信号を待つ束の間の虫時雨
灼くる畦手で顔隠し復員す
山に逃げ遠き空爆見えし夏
十歳の記憶の薄る熟トマト
きらきらと水の玉おき蓮浮葉

佐野 売野 緑

金子恵子

木村君子

黒川しげ子

齋藤ミチ子

高田貴子

店網洋子

木洩れ日やうす紅色の椿の実
指先をぱつと跳ねたる蝗かな
木洩れ日の織り成す影の秋気かな

佐野

菰原美穂子

秋暑し浅瀬に子らの声高き
満天星を刈り込む頬に秋の風
虫の音と満天の星と白ワイン

義本美智江

翡翠の一直線に向う岸
片蔭を砂利乗せて行く一輪車

仙人掌に山褰深しねむの花

古河

青木正男

おでん鍋をんなの遺恨聞くことも
北国の漁期短し鮭風

広重の藍につつまれ夕涼み

志木

汐見克彦

遠雷の微かな光雲流る

苔茂る佐久の名刺ひそとして

声明の大樹となりし蟬時雨

森山洋之助

落蟬の看取るものなき仰臥かな
いつの間にか虫の声する帰り道

雪山を眺むるスイスのお花畑

新座

多田英治

庭の萩大きく育ち垣根越ゆ

朝顔の二階の閨を覗きけり

新蕎麦に草の香りのうれしかり
向日葵の不動のままに枯れにけり

川越

岡野輝子

新涼や木々を抜けゆく風かすか
昼顔の地熱の中に花開く

黒木敬子

冷酒を流しの前に立ちながら
腕まくり日焼の度合比べたり

津金房子

硝子戸に礫のごと守宮ゐて
事件起き右往左往の蟻の列

山本敦子

干乾びし舗道の蚯蚓みな曲り
蔵町の柵をすつて去ぬ燕

珠洲焼に桔梗一輪綾子の忌

夏雉子の一と声走る見沼野に

千葉

大月玲子

金鱗の鯉跳びはぬる秋の空

三方の山に抱かれ水の秋

霊峰の稜線さやか秋彼岸

岡野恵美子

緑蔭に配達人の昼寝時

残暑見舞ライン動画の火花火

ソーダ水ごめん〴〵の一言待ちながら

搾乳の牛の眼澄める今朝の秋
金婚の師を言祝ぐや酔芙蓉

高田みや子

夕月夜投函はがき読み返し
翅少し広げてゐたり終の蟬
降り出しの雨の匂ひや蕎麦の花
ちんぐるま吹かるころやあきあかね
花火なき空に稲妻流星群
子も犬も乳母車を止す秋日和
秋没日隠れん坊はちりぢりに
いつの間に胸まで毛布今朝の秋
新刊の落款の紅夜半の秋
單調な響きに午睡小海線
たつぷりと湿り青苔茂りけり
白南風の待ちに待つたる眩しさよ
葉に隠れ南瓜何時しか真ん丸に
真四角の椅子の硬さや心太
恙なく過ごせし日々や冷奴
バス通り一駅続く百日紅
赤紫蘇や梅酢合はせてルビー色
亡き父母に近況語り墓洗ふ
蜘蛛の罫の朝日に映ゆる稲の先
八十路なる図書館かよひ秋惜しむ

酒々井

小林あけみ

佐合 新谷八郎

有泉正夫

杉田富美代

鈴木美根子

立原千代子

米田敏子

空青く鬼門を守る石榴かな
雲流れ電車待つ間や秋の虹
雀らよ木蔭に入れ白雨急
緑蔭の研師に一人来たりけり
独り居へとかげ親しく現るる
ジーンズの膝の大穴残暑かな
皿洗ふ音のこぼるる秋の夜
秋の蟬五百羅漢のにが笑ひ
父祖の墓鎮座したまふ雨蛙
白壁にへばりつきたり油蟬
故郷の母校閉鎖や赤とんぼ
特攻の郷のお茶飲み終戦日
もはや死語「遺族の家」や終戦日
四重奏五重奏かな蟬しぐれ
小流れの音をいだきて夏の草
ひとひらに音しのばせて竹落葉
棒二本軍手干さるる秋夕日
一日中冷房かけよ生き抜けよ
目薬を点して出かける酷暑かな
老人が敬老会の世話役に

習志野

清水礼子

船橋

内田節子

槐島 修

山口秀吉

鹿毛満子

村田由美子

けさもくるオレンジ色の秋の蝶

松戸

石川幸子

ベランダに円椅子一つ雨月かな

ジャズ喫茶ジョッキにどかと草の花

夏の蜂猛々しくて襲ひけり

秋の風知覧の友は返り来ず

八月や押入れに死がどつしりと

紙魚走る郷土史にみる髭の父

秋蟬の鳴き残りたる静けさや

遺されし母の杖借る花野かな

白ばらに小糠雨降る朝かな

万緑を映す川面の鏡かな

雲の峰沈む夕日を隠したる

富士の山のろのろ見やる穴まどひ

市川

奥澤よし江

熱下がる吾子の寝息や初ちちろ

夜深む初物の栗むいてをり

土砂降りのあがるやいなや秋の虹

東京

安藤美酒々

名月にしかと向き合ふ丑三つ時

秋の声ふとふりかへる文士村

玉音を聞きし駅前蟬しぐれ

バルコンの隅に空蟬在りしかな

石井登女

ドーヴィルの海なつかしき浜日傘

まくなぎを左右にはらひ木蔭道

東京

石山風童

公園の木椅子に一人百日紅

雨の朝庭隅になくちちろ虫

刈り後の匂ふ小庭や今朝の秋

畑道の朝顔の種零れたり

秋澄むや浅瀬を小鷺突きをる

家ごとに咲きし朝顔遠し昭和

子規庵にけふも人ごゑ糸瓜垂る

心地よき風の四阿水引草

影のごと露地に消えたり黒揚羽

正座して絵莫莖織る母座りだこ

青ふくべ子猫じやれ合ふ縁の下

天高し田圃アートの案内板

焼き栗の破裂する音道の駅

秋場所や放物線に清め塩

切株の椅子を隠して草茂る

石垣の上から垂るる萩の花

掃除機の音が掻き消す蟬時雨

ひめゆりの濠に消えゆく秋の蝶

岡村純子

北口富栄

草間三香子

桑原優美子

小池清晴

小池宗彦

折鶴のずしりと重し原爆忌

寝姿山に幕府の砲台葛の花

塗箸を逃げて崩るる新豆腐

東京 高野翠子

門柱のかはりの櫓小鳥来る

完成の大人の塗り絵敬老日

新涼や登校の子の駆けて行く

田崎京子

荒川の涼風受けて橋渡る

落ち蟬を幼な子耳に当ててみる

膝にだき志ん朝落語籐の椅子

鶴田智美

髪額にひたと張りつき秋暑し

幾度も書き直す文秋の夜

何やかやいへど秋めく日和かな

中澤桃子

色づきて枝八方の実むらさき

敬老日町会からのカステラ

息つめて手火花囲む膝小僧

長谷川信也

五重塔の跡地これしき秋彼岸

飽食の列島過疎に終戦忌

読みかけの本閉ぢてきく虫しぐれ

馬場美智子

夕厨煮物フツフツ残暑かな

裏町に遊ぶ子居らず赤とんぼ

夏の雲舵ある如く重ならず

東京 順子

立ち退きの家なき跡の酔芙蓉

蝶の影ふたつ競ひて道を這ふ

八月に産まれ来る子とランチして

平子甲奈

九キロ増えたと笑ふ臨月夏盛る

盆休み迷子を告ぐるアナウンス

福田ふみ子

木陰にて秋風を知る散歩かな

驟雨来て一斉に止む虫の声

椿の実割れてこぼれて簍の中

藤田信子

敗戦の夜サイパンよりのジャズ幽か

台風の子報べランダの鉢寄する

敬老日といはれ馬齢のこそばゆい

本多 葵

夏の日で織りしかみんみんぜみの羽

青筋揚羽我の日傘に涼みけり

金平糖散らばるやうに百日紅

松本幸男

秋燕川面に今朝の影はなし

溪流に身を委ねをる炎暑かな

大手門大蟪蛄が鎌広げ

三村紀子

三月経てまた盛り返す百日紅

法師蟬果つるやレース纏ふまま

コンバイン繰り出す旧道秋日射

涼しげに一筋の雲富士青し三南場雅子

白靴を履きて闊歩のまねしたる

人絶えし高尾山口百日紅

母植ゑし桔梗の紺の深みけり国立阿部幸子

手触りをそつと確かむ狗尾草

朝日差す窓を開くれば秋の風

蝸や宿題はあと数ページ日野渡辺八枝子

真青なる二百十日の空見あげ

会へぬ日を折鶴千羽星流る横浜阿部トキ

産土神の急階段や蟬時雨

猛暑かなブーゲンビリア二度目咲く

墓洗ふ孫の結婚告げながら

飴色の出して使はぬ籠枕 大駒泰子

空蟬の郵便箱に届きをり

丸刈りのあぢさゐの道蟬時雨

花芙蓉薄き花弁たたみけり 岡元枝

夜明け方声を限りに秋の蟬

草の花小さきガラスの瓶に挿す

賜りし句集を膝に夏惜しむ 奥野周光

青空に白雲うかべ秋立ちぬ

鳶の家焦土と化せし敗戦日

老猫の声出ぬ五日酷暑なる横浜加藤和子

夕暮れて又一しきり蟬時雨

早々と紅き柘榴の花は実に

単線の列車待つ間や秋の雲 坂本具子

虫すだく大島の灯の遠く揺れ

夏果ての波音高き露天風呂

夕星や芋殻折る音門の辺に 富田 要

西昏れて地平近くに二日月

おかつばの囲む線香花火かな

森深く鎮守おはすや苔の花 長野高朋

廃校の廊下を照らす大西日

禰宜につき茅の輪くぐるやコロナ除け

雨戸引く胸啞蟬にとびつかれ 三木豊子

灯を消して蟋蟀の声近くなり

エプロンに軋む朝挽ぎ秋茄子

かき氷昭和生れはいちごなり 村上明弘

食材を買ひに男の大西日

うなぎの日今日は買はずと決めにけり

盆寺の裏はフランス大使館 横浜 豊 美佐子

逗子葉山行の隧道滴れり

コロナ禍の検査入院夜の雷

玉音に直立不動敗戦日 川崎 青木明代

萩の門女主も老いにけり

霧しまくビーンスラインのカーブかな

庭掃除バツタ止まりぬ手の甲に 安田良子

雨止んで一斉に鳴く秋の蟬

石垣の崩れし狭間彼岸花

八月や慰霊登山も行事とし 横山ユキ子

吹く風に湿原秋の気配かな

かなぶんや寺の厠の白熱灯

盆波や白砂過る鳶の影 伊勢原 長嶋和子

境内の移動図書館赤とんぼ

蛸や路地に残れるチョーク跡

鎧戸の静かな軋み夜の秋 山本カツ子

暮れ方の渡り来る風赤とんぼ

稲の花穂先に光る昨夜の雨

役終へて畦大の字の案山子かな 森野 秋山憲三

今日の日を惜しむが如く蟬時雨

溪谷の日暮れの早し河鹿笛
次々と甲斐駒越えて罌雲 甲府 江口嘉郎

ラムネ玉鳴らす子供ら珠算塾

駐在所机にカンナいつも留守

水引草風の遊びの素直なり 静岡 興津千鶴子

子袋を抱へ大蜘蛛巢の真中

耳元をすり抜けてゆく涼気かな

天高し竜を彫りたる長屋門 杉山紀美子

鶴鶴や山懐の兜屋根

山肌を昇りてゆけり霧の声

水音へ夏蝶のくる二つ三つ 高橋一夫

庭すみを灯すごとくに花茗荷

集落を見下す社赤蜻蛉 田中秀幸

秋暑し鉄筋工の声荒き

急流を鮎の落ちゆく夕べかな

赤銅の笑顔振りまく盆踊 筑地裕子

毘仕掛く唐黍畑へ猿現るる

渡船行く波打つ湖の涼しさよ

蜻蛉に囲まれてをり畑仕舞

はたはたの向う岸まで一直線 内藤允昭

盆花の紫濃きを選りてをり

捨て畑や背ほどに伸ぶる花芒

てんと虫飛ぶや葉先の揺れ残る

静岡 本多ひとみ

目覚しは午前六時の蟬時雨

すりこぎを振り上げてをり案山子どん

綻びのレースの日傘捨てがたく

望月 南

真青なる空に反転夏つばめ

城山の傳承跡地蟬しぐれ

観音の宝珠掠むる秋の蟬

矢野喜久江

榎の実や四百年の命継ぐ

鶏頭花参道に沿ひ朱を散らす

美しき焰の照らす魂送り

焼津 小梁洋子

流灯の手つなぐやうに川の闇

金色の穂波に溺れ稗を抜く

サンダルを川除地蔵の足に添へ

川根町 鈴木裕一

ヒュッと音天向く顔に大花火

地藏盆子等の声なく香を聞く

蛸や白き半月うかびけり

津 瀬野喜代子

東へと二百十日の鴉飛ぶ

水菓子と言うて小さき梨をむく

つくつくし少し傾く父母の墓

金沢

白村喜久代

暮れてなほ仄と明るき花芙蓉

真つ青な空の記憶や敗戦日

台風にあたたかき風吹きにけり

北野陽子

花芒ゆれてゆれたり山の道

山梨の梨の固さに歯がたたず

寝る時と違ふ虫鳴く夜明けかな

新出祐子

突然の水音羽音蓮の闇

たうきびや粒の数あるひげの数

加佐岬水湧く崖の葛の花

高木艶子

拝殿の鈴を鳴らして秋の風

秋茄子茹で湯の紺に母思ふ

手習ひの文字生き生きと涼新た

田上ナツ子

音読の声爽やかやお下げ髪

懸命に草食む仔山羊秋の空

壁に掛かる色紙落下す夏の果

道場啓子

起き抜けの厨僅かに冷氣あり

白クレヨンこすつただけの秋の雲

みのり田を照らす稲妻いくたびも

生れたての蟬打つ雨の強さかな

廣田宏美

雨曇り向日葵の向き定まらず
語り部の手をとる乙女原爆忌
光秀の念持仏とや蚯蚓鳴く
濡れ髪へ色なき風の触れゆけり
黙禱の涙は汗と頬つたひ
招魂社の集合写真秋日和
まだ上手く鳴かれず今朝のちろかな
長生きの相と言はれし鶏頭花
石叩き来てゐる畑大根蒔く
夫の墓一本道に通草垂る
長月に四十度越えとテロップで
路地に波薄青色の螢草
蟋蟀か鈴虫なのか孫の間ふ
虹の輪へ華やぐ夕の明かりかな
仄暗き山林ひびく蟬しぐれ
稔り田や豊かに流る手取川
色鳥に妻の行方を尋ねけり
亡き妻の声せし秋の目覚めかな
子らの輪の中で弾ける鳳仙花
宿の秋箱階段の燦し色

金沢

松田好子

宮崎惠美

谷内瑞江

白山

鶴尾正江

敦賀

大田ふじ枝

近江富士かりがね声をこぼし飛ぶ
皆あと百舌の一声のこりけり
鳴き砂の浜の一里や夕立晴
文宮より古き封書や虫の声
穂高嶺の山肌青く無月かな
秋立ちぬ帰郷の是非を悩みつ
天空の足湯にしばし秋あかね
灯籠を流す夜のなき氣比の海
野仏の肩打ちて落つ棗の実
八方に木肌の照りや百日紅
新豆腐香りすがしき加賀のれん
緑蔭に溢るる清水飲み干しぬ
コロナ禍に湯の町沈む秋時雨
樹々の吐く息秋声と聞きにけり
産小屋は女の修羅場ほたる草
掌の上に采の目に切る新豆腐
鬼灯を鳴らし昭和を懐しむ
大根蒔く種一粒の神秘かな
祈り深し雨の七夕飾りかな
たちまちに風紋消して土用波

敦賀

川口和代

田嶋豊年

中川雅月

中村秀一

前川千代枝

山本一枝

風たちて返す葉かげや葛の花 富田林 前島 幸

アンテナに鴉一羽や秋暑し

梅雨あけや庭木の影のくつきりと

花柄を着て梅雨の空髪切りに 徳島林 早苗

駆足の児に追ひつけず青葉風

墓石に水の弾ける炎暑かな

梅雨明けや潦にも青き空 平岡 功

梅干すや少年の日の浅眠り

一番星瞬きはじむ月見草

梅干や親父ゆづりのまろき味 山本晴美

盆花を背のびして取る山の肌

盂蘭盆経僧侶に受くる御勧め本

夏草の中より出でし花 鉢 山本瑤子

空蟬の上に空蟬しがみつ

鳴く蟬に個性ありけり今朝の庭

纫袋取れ高競ふ集会所 石井 木内マヤ

ヘルペスに目玉盗まれサングラス

身寄りなき人や炎天茶毘に付す

真つ黒な己が影踏む残暑かな 小松島 岡田あゆみ

阿波踊り踊らぬ街となりけり

炊き上がる粥の甘さよ暑氣中り

鳩よけのネットのかすむ残暑かな 福岡 相本和子

背高の町の向日葵よこならび

入院のことなどわすれ梨を食ふ

盆前に生花を買ひて神棚へ 石原好宏

蜩の一日中鳴く庭先で

秋立つや夜中に強めの雨降りぬ

広島で産まれし子等よ終戦日 園田清子

茄子紺の色そのままの揚げ浸し

盆休み二匹の猫の里帰り

氾濫の修羅場と化せり梅雨出水 鶴田輝代

体当たりする蟬我にゆばりせり

我に触るるアサギマダラや梅雨明くる

音たてて天井走る夜の蜘蛛 宮田千恵子

採血す針に秋暑の日の鈍く

母の墓団子供へて盂蘭盆会

戻してもまた裏返る秋の蟬 那珂川 高山ひさ子

じよろの水浴び三方へ蟻蛸跳ぶ

開き始むオクラの花に蟻群るる

靴下を脱ぎし途端の嚏かな 長崎 下見直哉

里山の流れ堰き止む落葉かな

老いの身に刺激の強き柚湯かな

露天風呂月を壊して浸りたる

長崎

永田美知子

猿の如巨峰頬にも両手にも

猪垣の壊されしまま彼岸花

すいとんに語らせてゐる終戦日

西海

山下敦子

秋の日の影やはらかに巢蜜採る

一葉落ち地上に場所を定めたり

女坂に沿ひて真白き玉すだれ

那覇

砂川道子

漂へる雲押し退けて大西日

島御香小石に置いて魂送

ともがらに鋤形分かつ餌を添へて

札幌

吉田克己

牛ねまる北大農場草いきれ

草刈や腕の静脈浮き上がる

新庄

曾野部礼子

いづれにも纏はりついて酷暑なり

金魚売り水跡残し去りにけり

新潟

佐藤シズエ

一歳の足にリズムや盆踊

ぬひぐるみ離さぬ老母秋暑し

島津治子

愛用の日傘戻りてゐたりけり

風の来る窓に風鈴かけかふる

鹿沼

渡辺利子

稲の花結婚せしと隣の子

木下闇ナナフシ探す男の子かな

佐野

関口かつ子

秋暑し蒺藜の葉のいきいきと

秋澄めりマリンプルーの山上湖

仲山さよ子

茂林寺の参道抜くる処暑の風

雨のあと梯梧の若葉風に揺る

さいたま

須藤初枝

雷雨来る庭一面の池となり

境内の松の古木に青葉木菟

川越

常見イツ子

角曲り秋風抜くる散歩道

三十五年経し御巢鷹の夏木立

千葉

喜多恭仁子

剪定の枯れても痛し薔薇の棘

打水や地球の乾き極限に

松浦陵保

水澄むや尾瀬の沼地の花百種

落つる砂見つめ秋思や砂時計

柳澤道子

雲間より光の矢受け秋の海

夏鴨は広がる雲へ羽拡ぐ

船橋

入河 大

ざざぶりに細く小さな蟬の声

たんぼには怒り顔なる案山子かな

近藤澄子

ペランダを訪れくれしおにやんま

引つ越しの寝転ぶ畳に蟬時雨

東京

斉藤孝夫

おにぎりや桶に並べて野分の夜

日の暮の散歩する道こぼれ萩 東京 戸川節子

池の縁の風にたゆたふ白式部

ぬけ殻を残し飛立つ法師蟬 西村サカエ

茄子の花紫うすく秋の色

梅雨明けて祈りの日々に近付けり 宮崎正義

真白なる芙蓉の花に夕日映ゆ

骨つぼの温さの残る白木槿 府中 竹村晃子

店先の迷ひ迷つてマスカット 明日はずんだ餡太りし枝豆挽ぐ一日 国分寺 中ノあさ子

残暑厳し店頭の野菜高騰す

アパートの戸びら閉ざされ花大根 横浜 柴田雅春

鉄道の柵一叢の花菜かな

井戸蓋へ青柿落つる山家かな 鈴木律子

吊橋へ釣船草をかき分けて

秋茗荷越の田圃の泥つけて 鎌倉 佐藤千晴

マスカット供へて仏壇明るうす

故郷の山の幻影秋の夜 伊勢原 本島 廣

彼の世からベランダ照らす盆の月

ガラス窓霧氷煌めく夜明けかな 松本 藤森利子

夜明け前庭先賑し虫の声
爽籟や美術館へと向かふ径 静岡 大石弘子
勤め終へ空を見上ぐる案山子連

俳句年鑑 2021 年版

角川「俳句」別冊(カドカワ別冊) 12月7日 発売予定 予定 3000円(税別)

口絵 ● 二〇二〇年一〇〇句選……岸本尚毅選
写真でたどる 二〇二〇年の俳壇

【巻頭提言】……井上弘美

年代別 二〇二〇年の収穫

諸家自選五句……約六〇〇名!

今年の句集ベスト15 四協会の一年
今年の評論ベスト7 各俳句賞のひとごとほか

合評鼎談 山尾玉藻・三村純也・山口昭男
今年の秀句を振り返る

総集編 令和俳壇心に残る秀句「発表!」

●全国結社・俳誌 一年の動向 都道府県別目次付き!

●全国俳人住所録 約三三〇〇名を一挙掲載!

KADOKAWA

発行:角川文化振興財団 発売:株式会社KADOKAWA
●お問い合わせ先(注文) TEL.0570-002-008 (KADOKAWA購入窓口)

万象作品の佳句

飛 高 隆 夫

台風裡白き燈しへヨハネ傳 謝花寛 菅

家の外には台風が押し寄せ、大荒れに荒れていても、宗教者である作者は白い燈の下、聖書に読みふけっている。「白き燈し」は全てを明らかにする光の意味であろうか。ヨハネ伝は他の福音書に比べて生命や愛（神の愛、キリストの愛、キリスト教徒の愛）が強調されているという。「燈しへ」は「燈しへ差し出す」という文脈になるので検証するということになるのだろうか。作者は那覇の人。

底紅に日照雨のあとの日差かな 小板橋泰山

底紅は白木槿の底が紅色を帯びていて、清楚さに艶なる感じを添えている。底紅は夏から秋へと長い花期を持つが、通り雨により潤いを帯びた空気の中、和らいだ日差しに包まれているのは、いかにも晩夏の風物という感じである。作者横浜の人。

夏の果てかすかに見ゆる土星の輪 中谷由郁

土星は太陽系の惑星で、惑星中木星に次いで大きい。形態上の特色は赤道の周囲に、宇宙塵より成る薄い板状の環を持っていることで、これは写真によりよく知られている。しかしこの句では「かすかに見ゆる」と実際に見ているのである。

天体望遠鏡でも見たのであろうか。ともあれ、この行為は夏の果ての、遠いものに思いをやる気分にあふわしい。作者は大和の人。

栗食むや憶良に負けず子煩惱 大林彬彦

憶良は万葉歌人の山上憶良。この句は、万葉集巻五の「子等を思ふ歌」に「瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして思はゆ」とあるのを踏まえた句。「憶良に負けず子煩惱」というが、「いづくより 来たりしものか まなかひに もとなかかりて 安眠しなさぬ」と続きを読むと、さてと首を傾げざるを得ないが、作者はそう思われるのを承知の上で、このようにいつているのである。作者は調布の人。

潦見つけとんぼうホバリング 久保田富士子

潦は、只の水溜まりとして使われている例も多いが、辞書をひくと、雨が降って地上にたまり流れる水、とある。雨のあとの、雨降りの作った水溜まりなのである。水溜まりの上でとんぼがホバリングしている光景はよく見るが、この句、とんぼが水溜まりを見つけて、といったところが面白い。いわなくても、とんぼが見つけたことに違いないのだが、わざわざいうことによつてとんぼがまったく違って見える。作者は茅ヶ崎の人。

青鷺の大きな弧の着地点 砂地宏子

巢山の上で賑やかに飛び交っている姿。川の浅瀬などに佇

んでいる姿。青鷺の姿で印象的なのはこの二つであるが、作者はその後者、長い不動の姿勢から舞い立った青鷺が大きな弧を描いて飛翔する姿をとらえた。着地すればまた長い不動の姿勢に入るであろう。作者は飛翔する姿にその不動のたえずまいを重ねて見ているのである。作者は武蔵野の人。

飲みさしのストロー 残る街晩夏 鈴木隆久

テーブルの上にストローを差し込んだままの飲みさしのグラスがある。描かれてあるのはこれだけである。読者はそこから想像を働かせる。「街」とあるからレストランか喫茶店。外から見えるのだから窓際の席。なんとない気怠さが漂っている。それが晩夏の雰囲気によく似合う、というのである。作者は佐倉の人。

登高や遙かな街に雲間の日 入山繁幸

登高は旧暦九月九日に小高い丘や山に登り、天災や厄を払う行事であるが、作者は果たしてその思いで高いところに登ったのかどうか。それはともあれ、盛り空の下、見晴らした眼下の遠い街が、雲間の光にそだけ明るく浮き出して見える眺めは幻のようであったろう。作者は大阪の人。

隠沼に湧き上がりたる赤とんぼ 古谷悠紀子

とんぼは水中に産卵し、やごと呼ばれる幼虫は水中で過ごし、羽化して空中に出る。作者はそのいっせいに羽化する時に出会ったのであろうか。あるいはとんぼは夜は水辺に過ぐし、朝な朝な、そこを舞い立つのであろうか。おぼつかない

鑑賞であるが、この情景に出会った作者は幸せである。作者は松田の人。

秋虹を背に 老犬と老夫婦 佐藤幸示

秋の虹は夏の虹とは違った趣がある。淡くはかなく消えやすいというのが本情でやや憂愁を伴う。雨のあと、犬を連れての散歩だろう。愛犬の歩き方を見てお互いに年齢を重ねてきたものだとしみじみ思っているのである。同時作に〈海岸の家族を包む大夕焼〉がある。作者は新潟の人。

以下、三句組から。

秋澄むや老杉多き男坂 齋藤 信

句の骨格がしっかりしている。情景が眼前に浮かぶ。「秋澄む」という季語も適切。作者は新潟の人。

鐘つきて逃れる子等が萩揺らす 北井茂子

日常の片隅の情景。ささやかな出来事を丁寧に詠んでいる。作者は芳賀の人。

竹林の良き音貰ひ夕涼し 福武幸子

竹林の風にそよぐ音が涼しさを増幅させる。感覚の働いた句。作者は芳賀の人。

赤銅の笑顔振りまく盆踊 田中秀幸

「赤銅の笑顔」がいい。野で海で、働く日焼け顔。作者は静岡の人。

同人会便り

第三回中山純子記念俳句賞作品募集

故中山純子先生の功績を顕彰、記念するために企画したものです。毎年一回作品を同人より募り優秀作を表彰、「万象」同人俳句の向上、発展に資するもので、多数の応募を期待いたします。細目は次の通り。

応募資格 「万象」同人に限る

作品 一人十五句、未発表作品に限る

四百字詰原稿用紙（B4判）とし、冒頭欄外に題名を記入、また末尾欄外に住所、氏名を明記し、一通（コピー可）を提出のこと。封筒に「中山純子記念俳句賞応募」と朱書のこと。

選者 内海良太、小林愛子、福島せいぎ、江見悦子、

柳澤宗正、阿部月山子、井村和子

締切 令和三年二月十五日（月）

宛先 〒195-10055

町田市三輪緑山一ー三ー二ー三一五 吉中愛子

入賞発表及び授賞 第十七回「万象」同人会総会（令和三年

四月十六日（金）、学士会館（東京）を予定）に於いて。

授賞者には第二回授賞者と共に賞状と副賞を贈る。

追記：Eメール応募の場合は左記の二名へ同時発信のこと。

aiko.y17@nifty.com

oku.masami@coral.plala.or.jp

吉中愛子
奥 太雅（雅実）

珈琲ぶれいく ⑦



【問】今回はたくさん使われる「四段活用」についての勉強です。正しい方を選びましょう。

1. 大船や帆網に（からむ・からむる）冬の月

飯田蛇笏

正解は「からむ」。一句の意味は、大きな船の帆網に、からむように冬の月がかかっている、というものです。問題となる動詞は「からむ」です。マ行四段活用ですから「からまず」からみたり、からむ、からむとき、からめば、からめよと活用します。下五の「冬の月」という名詞につながりますから、連体形を使うこととなります。ここで注意をしたいのは、上二段や下二段の動詞の連体形との違いです。四段活用動詞では、終止形と連体形が同じ形になり、「からむる」という形はありません。

2. 胃に落ちて甘さ戻（ら・り）ぬ寒の水

石塚友二

正解は「り」。動詞「戻る」はマ行四段活用で「戻らず」戻りたり、戻る、戻るとき、戻れば、戻れよとなります。動詞に続く助動詞「ぬ」は、未然形接続の否定の「ぬ」か、連用形接続の完了の「ぬ」のどちらか。一句は、「寒の水の甘さが戻った」ということですから否定の「ぬ」はおかしい。そこで、完了の「ぬ」に接続する連用形「戻り」を使います。

令和2年の3月以降、世界規模の新型コロナウイルスの蔓延で、日本も外出自粛等を余儀なくされて通常の句会運営が不可能となり、代替策として通信句会等の対応が続いている。

大会・事業

令和2年の各地の新年俳句大会は、1月11日(土)北海道支部16名参加を皮切りに、1月13日(月・成人の日)第18回中央新年俳句大会(銀座アスターお茶の水賓館)60名、1月19日(日)新潟県支部10名、1月19日(日)「季節風」(静岡)38名(講師・日本平動物園長 柿島安博氏)、1月25日(土)「枳の葉」(栃木)23名、2月6日(木)「あかね句会」(金沢)27名(講師・内海良太主宰)でそれぞれ開催された。

第18回「万象」全国俳句大会及び第18回「万象」同人会総会は、会場に予定していた「ホテルグランドヒル市ヶ谷」「学士会館」が、新型コロナウイルスの流行で利用が不可能となったため、今年度は中止することとなった。

「万象」誌

「万象」誌発行の拠点である都立小松川高校同窓会館の松葉会館が、新型コロナウイルス感染防止のため閉鎖となり、3月から、編集、校正の担当者は、電話、FAX、メールなどによる情報交換で在宅作業を強いられることとなった。

「万象」誌は12月号で第19巻、通巻25号となった。内海良太主宰の「続・万象と共に」は48回となり、「同人作品」、「同人作品評」は内海良太主宰による。「万象作品」、「万象作品の佳句」は、担当の飛高隆夫が10月に急逝し、12月号

(本号)の選と選評が絶筆となった。

連載は、飛高隆夫句集『空の奥』自選句鑑賞が1月号で終了。2月号から引き続き自選句鑑賞が始まった。原田しずえ・山田春生の自選句鑑賞は4月号を以て終了。5月号から福島せいぎ・内藤恵子の自選句鑑賞が始まった。

「俳書探訪」は古川京子と曾根満が交替で担当している。「選者のほなし」は中村千久と三屋英俊が交替で担当していたが5月号の43回で中断。

「文学散歩」は8月号の32回目の埼玉で終了。

「郷土の俳人」は7月号の27回目の埼玉③を以て終了。

「私の一冊」、隔月の「添削教室」は3月号で終了。

俳人協会発行の「俳句カレンダー」への掲載句自註を2月号から掲載。

「特別作品評」は9月号まで沢田たけし、10月号から榎本文代が担当。「万象招待席評」は谷渡末枝が継続担当。

「同人作品評」は9月号まで成瀬真紀子、10月号から林陽子が担当。

「俳句の窓」は各地の句会の活動状況を紹介する企画で、6月号から始まったが、現在は中断。

「珈琲タイム」は5月号で終了。6月号から「珈琲ぶれい」に名称を変更して中村千久が継続担当。

「同人会便り」は毎月各地の同人が報告。

「万象ノオト」は会員中心の自由投稿の場で地域性豊かな内容で継続中。

各号に掲載した特集は次の通り。

1月号 内海良太主宰の「水飲んでさて獅子舞のうしろ脚」の色紙と年頭の挨拶。キーワードは、「氣宇壮大に志を高く」。副主宰の色紙は「初風や水平線に島置いて」。令和元年10月の第18回「万象」全国俳句大会記。新春特別作品は大内マキ子の「新雪」15句。

2月号 内海良太主宰による「写生の源流を求めて―『万象』の場合―」

3月号 第18回「万象」中央新年俳句大会記。「和やかに胸をどる」ひとひを過ごして

4月号 新年特集として北海道支部、新潟県支部、栃木・「栃の葉」、静岡・「季節風」、石川・「あかね句会」の新年俳句大会記。新同人11名による新同人競詠作品。

5月号 緊急のお知らせ。「万象」全国俳句大会及び同人会総会の中止について。岡本敬子による「新同人競詠作品評」。

6月号 「写生の源流を求めて」を讀んで」を荻野加壽子、大内マキ子、下嶽孝一、沢辺たけし。

7月号 「写生の源流を求めて」を讀んで」を穂苅照子、安岡みさき、芝宮留美子、松井佐枝子。

8月号 第18回「万象」新人賞発表 中鉢弘一。

「コロナ禍の中で」(各地の活動状況の報告) 松原智津子、佐藤雄二、亀田やす子、中村千久、沢辺たけし、吉中愛子、榎本文代、神田美穂子、中條睦子、倉谷紫龍、石原好宏、丸本祥夫、福島せいぎ、前田貴美子

9月号 句集鑑賞 三澤治子『花梯梧』柳澤宗正、三澤いつ子『紙雛』桔梗純。

10月号 「『なると』創刊45周年を祝す」内海良太主宰。第18回「万象」俳句賞発表。

11月号 新同人発表(後述の9名)

12月号 句集鑑賞 山田春生『薫風』福島せいぎ。句集・出版物

5月 三澤治子句集『花梯梧』、三澤いつ子遺句集『紙雛』、9月 山田春生『薫風』、10月 『福島せいぎ句集』、11月 福島吉美『モンローの笑み』

受賞 第18回「万象」俳句賞は、36篇の応募の中から内海保子の「出羽路」が受賞。佳作は穂苅照子、福島吉美、特別賞は中條今日子。第18回「万象」新人賞は中鉢弘一が受賞。第2回中山純子記念俳句賞は塩井志津が受賞。

新同人

入山繁幸(大阪)、売野 緑(佐野)、大林彬彦(調布)、岡村純子(東京)、草間三香子(東京)、謝花寛営(那覇)、砂地宏子(武蔵野)、中鉢弘一(札幌)、平岡 功(徳島)

物故同人 謹んでご冥福をお祈りいたします。

山形悦子さん(休会中) 88歳(4月1日・秋田)、山本麓潮さん89歳(5月31日・敦賀)、吉村光子さん89歳(7月8日・小平)、駒形祐子さん88歳(7月11日・佐野)、飛高隆夫先生83歳(10月16日・さいたま)。(大木 茂)

「万象」同人句会報

(九月例会に替えて通信句会) 45名

内海良太主宰選

湖霧へ山霧なだれこみにけり 丸本祥夫
 長き夜や徒然草を読み返す 名和政代
 切株に大きな茸きつね雨 小林愛子
 水菓子とふ言葉なつかし桃を剥く 中村千久
 黒雲の端を割りたり初月夜 広瀬俊雄
 新米来今年限りと姉の文 喜多尾明子
 銅鑼の音の港の丘に秋惜しむ 山崎郁子
 早稲の香を確かむ国勢調査員 吉中愛子
 秋の雷カストリとあるお品書 田中道江
 黒塀に沿ふ一列の曼珠沙華 山本とく江
 胸豊かな祖母でありたり衣被 恒川清爾
 いくたりの読みし古本鳥渡る 田中幹也
 夏休みがまんする事おぼえし子 三澤治子
 ⑨装束の神官一人秋まつり 吉中愛子

社務所には今年は新型コロナウィルスの影響で、例年の祭りは止めて「神事のみを執り行います」のビラが貼つてある。正装の神官一人がうやうやしく祝詞を奏上。その声が神域に響き何とも寂しい。八百万の神々も今年は旅を自粛するのだろうか。今年の世相を記憶する一句となつた。

⑩熊楠の細字百卷天高し 江見悦子

南方熊楠、和歌山が生んだ博物学の巨星。日本にミナカタありと世界の学者をふり向かせた。作者は和歌山県白浜の南方にある熊楠記念館に寄られたのだろう。ここには熊楠が10歳から書き始め15歳の時に完成した「和漢三才図会」百五巻が展示されている。天高く突き抜けるような天才ぶりには驚くばかりである。

小林愛子副主宰選

竹伐つて山峡の空ひろげたり 赤松郁代
 通り雨捨てし間引菜立ち上がる 赤松郁代
 青柿の色づき初むる子規忌かな 名和政代
 炎天を帰りにて外す黒ネクタイ 内海良太
 秋の雷カストリとあるお品書き 田中道江
 卓上に大人のぬり絵小鳥来る 榎本文代
 ⑩熊楠の細字百卷天高し 江見悦子

南方熊楠といえば反射的に粘菌という言葉が浮かぶ。「細字百卷」は、その学者としての功績の賜物であろう。また彼は熊野の自然を守るため自然保護運動家として立ち上がった。エコロジー発想の最初の日本人として人びとに深く記憶される。「天高し」はぴったりである。

榎本文代選

白秋や風見ゆるまで窓磨く 山本右近
 熊楠の細字百卷天高し 江見悦子
 駅蕎麦が旅の始めや秋高し 横川良子

雁渡し錆吹いてゐる裏の門 小林愛子
垂直の雲のくづれていつか秋 中村千久
つつましく人の集へる子規忌かな 内海保子
⑨いくたりの読みし古本鳥渡る 田中幹也
句から見えるのは、古びて色あせた本。古書店とも思えるが、作者は一冊の本を手にして、秋の深まりを感じている。鳥渡るの季語を配して、想像のふくらむ一句。

江見悦子選

沼尻に出水の名残蘆の花 横川良子
柵越えて天下窺ふ藪枯らし 柳澤宗正
つつましく人の集へる子規忌かな 内海保子
いくたりの読みし古本鳥渡る 田中幹也
楠の大きいなる影小鳥来る 沢辺たけし
畑土の罅われの底ちちろ鳴く 広瀬俊雄
⑩早稲の香を確かむ国勢調査員 吉中愛子
今年は五年に一度の国勢調査の年。回答はインターネットで、と推奨されているが、まだまだ調査員が各戸を訪問する事が多い。書類を抱えた調査員が足を止め、早稲の穂を手に取り香を確かめている。本業は稲作農家なのだ。この地に根を張った確かな暮らし。ふと見かけた景を切り取り深みがある。

吉中愛子選

蜻蛉の待合室を抜けゆけり 桔梗 純

老漁夫の真白きシャツや魂送り 内海良太
熊楠の細字百巻天高し 江見悦子
新米来今年限りと姉の文 喜多尾明子
まつ白な壁まつすぐな曼珠沙華 榎本文代
いくたりの読みし古本鳥渡る 田中幹也
⑪その奥にみいちゃん墓竹の春 疋田華子
みいちゃんは子供か猫か、何も語っていない。みいちゃんは猫の名に多いので、多分猫であろうと想像する。「その奥」という控えめな場所にそと置かれた墓。手前にはご先祖様の墓がでんと坐っている。一族に可愛がられたみいちゃんは一家の仲間である。青々と枝葉の茂る竹の春が抜群の季語。

広瀬俊雄選

稲渾火の煙る刈田や遠筑波 三屋英俊
白秋や風見ゆるまで窓磨く 山本右近
通り雨捨てし間引菜立ち上がる 赤松郁代
熊楠の細字百巻天高し 江見悦子
石垣の隙間の小石秋澄めり 大久保進
まつ白な壁まつすぐな曼珠沙華 榎本文代
⑫運針の針目揃はぬ秋の暮 横川良子
運針という言葉に、遠い昔の母の姿を思い出した。その頃母はお針子の内職をしていた。出来上がると、仕立を頼まれた呉服屋まで、私が届けに行つた事もしばしばあった。今時、そのような仕事があるかどうかは知らない。この場合、その

ような仕事ではないかも知れないが、視力の落ちる夕暮れ時、
摘む針目を気にしている様子が浮かぶ。

沢辺たけし選

弾痕は戊辰の疵や萩の寺 山崎郁子
雨音の秋となりゆく八重葎 内海良太
白秋や風見ゆるまで窓磨く 山本右近
部屋の灯を消して良夜と向かひ合ふ 宮本加津代
ふるさとの友に文書く秋彼岸 榎本文代
さやけて雲の白さを眩しめり 赤堀洋子
⑤ひとつかみ間引菜入れる朝の汁 中嶋久登
「間引菜」という言葉には哀しいひびきを感じるのだが、畑
で野菜を作っている人は、そんなことを言つてられない。無
駄なく食に使うの方が重要である。掲句は「ひとつかみ」
が良い、これで感傷的な気分は吹つ飛び、「朝の汁」が鮮やか
な緑によつて美味そうに見えてくる。そして口語の「入れる」
が句を歯切れよくしている。

山本右近選

赤芋茎飛び出してをりエコバッグ 久留島規子
稲滓火の煙る刈田や遠筑波 三屋英俊
雨音の秋となりゆく八重葎 内海良太
切株に大きな茸きつね雨 小林愛子
仕舞湯の窓を叩けり金亀子 下嶽孝一
細波の池にとなめの夕とんぼ 大橋雅子

⑥故郷の廃るる 棚田 彼岸花 山本とく江
農村の高齢化が進み、他方で機械化が進展して棚田のよう
な手仕事に頼る小規模な田畑は耕作されずに放置されている。
かつてはその棚田の細い畦にのみ咲いた彼岸花も、今では棚
田のあつた全面に咲いているのかもしれない。限界集落化を辿
る故郷への恠しさを曼殊沙華を通して詠んでいる。

中村千久選

竹伐つて山峡の空ひろげたり 赤松郁代
湖霧へ山霧なだれこみにけり 丸本祥夫
白秋や風見ゆるまで窓磨く 山本右近
駅蕎麦が旅の始めや秋高し 横川良子
運針の針目揃はぬ秋の暮 横川良子
畑土の罅われの底ちちろ鳴く 広瀬俊雄
⑦稲滓火の煙る刈田や遠筑波 三屋英俊
「稲滓火(いなしび)」は、稲刈りの後の藁屑や脱穀の後の
粃殻を、夕方にかけて燃やす火のことだという。薄闇に包ま
れた刈田を流れる白い煙。小さな炎もちらちらと見える。そ
の遙か向こうには、夕闇に暮れてゆく筑波の山容が見えてい
る。静かな秋の夕暮れの情景が描かれている。

三屋英俊選

ジグザグの空ひまはりの大迷路 中村千久
弾痕は戊辰の疵や萩の寺 山崎郁子
熊楠の細字百巻天高し 江見悦子

秋の雷カストリとあるお品書

田中道江

のぼたんや一日のいのち色にこめ

宮本加津代

色鳥や黍団子売る城下町

山田春生

特雨音の秋となりゆく八重葎

内海良太

作者は雨音の微妙な変化の中に「秋」を感じ取った。季節が秋に変わる頃、よく小雨の日が続く。秋の雨には蕭条とした独特の趣があるが、作者はそれを感じ取っている。「八重葎」でそれがわかる。小倉百人一首に「八重葎しげれる宿の淋しきに人こそ見えね秋は来にけり」がある。これに通ずる感性。

▽中央句会12月例会に替えて通信句会

11月30日投句締切

▽同人句会12月例会に替えて通信句会

12月19日投句締切



俳雑

第23回

【愉の魔】

八木 忠栄

いい俳句を作ろうとしているわけではないけれど、俳句はますますむずかしい。だからと言って私の場合、日頃から艱難辛苦し、特別に鍛錬しているわけではない。そのあたりに俳人でないという甘えがあるのだ、と非難されても仕方がない。「むずかしさ」を、どこかで愉しんでいるフシもあるのだから。

長いこと書いてきた詩も「ますますむずかしい」ことにかわりがないのだから、いわんや俳句においてをや、である。両者のむずかしさには微妙な違いがあるけれど、その根底には、どうやら「愉の魔」といったものもひそかに潜み、こちらに意地悪くほくそ笑んでいるように思われる。これは理屈ではない。そこがクセモノなのかもしれない。俳句や詩にかぎらず、文学芸術にはおそらく「愉の魔」といったものがひそんでいるのかもしれない。だから一旦のめりこんでしまうと、そこから容易にアシを洗えなくなってしまう。

〈愉の魔〉に愛想づかしができないかぎり、何が季語だ、切れ字だ、結社だ、と息巻いても、当分シコシコとまた五七五の指を折るしかあるまい。

句会名	開催日時	会 場	指 導	幹 事	幹事電話番号
萩 の 風	第4木・第4火・ 第3木・1時	生涯学習センター	田 嶋 豊 年	田 嶋 豊 年	0770-23-6444
ま つ か ぜ	第4火・1時	北公民館	石田野武男	倉 谷 紫 龍	0770-22-1619
た つ み	第2日・1時	南公民館	石田野武男	石田野武男	0770-25-0026
徳 島	第4土・2時	万福寺	福島せいぎ	福 島 吉 美	088-625-1500
美 蓉	第1水・1時	男女共同参画センターアミカス	小 林 愛 子	石 原 好 宏	090-8229-4181
長 崎 鳴 滝	第3日・1時	鳴滝西部公民館	丸 本 祥 夫	永田美知子	095-822-8624
真 南 風	第1土・3時	ふう	前田貴美子	前田貴美子	098-834-7086
ふ う	第4木・7時	ふう	前田貴美子	前田貴美子	098-834-7086

※内容に変更のあった場合は総務の内田郁代(☎047-163-6810)までご連絡下さい。

連載 シリーズ「コロナの時代の俳人たち」鳥居真里子・しなだしん 名句水先案内 小川軽舟／偏愛俳人館 恩田侑布子 現代俳句時評 白濱一羊／野菜の十二月 南うみを 漢字 四季折々 笹原宏之	句集特集 ▼一句鑑賞 人と作品 井上弘美・高田正子 山西雅子・高柳克弘 藤本美和子『冬泉』 長嶺千晶	大 特 集 ▼総論 ▼冬の季語 本意と実作ポイント 天文／時候・地理／生活・行事／動物／植物 ▼新年の季語 本意／家で「新年」を詠むポイント ▼作句ワンポイント「年賀状に一句」 冬・新年の季語入門 今井聖	特別作品 鷹羽狩行・行方克巳・小林貴子 俳句 12月号 予告 11月25日発売 予価(本体864円＋税)
電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(https://bookwalker.jp/)など電子書店で購入できます。 発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA https://www.kadokawa.co.jp/			

句会名	開催日時	会 場	指 導	幹 事	幹事電話番号
戸塚品濃	第2月・1時	品濃クラブ	恒川清爾	恒川清爾	0467-32-6578
ミモザ	第1木・10時半	榎本文代宅	榎本文代	榎本文代	045-953-4246
川崎	第1日・1時	教育文化会館	柳澤・新妻	新妻奎子	044-573-9249
伊勢原	第4水・10時	中央公民館	吉中・佐藤	佐藤和子	0463-93-3979
茅ヶ崎あかしあ	第1火・1時	太陽の郷	三澤治子	久保田富士子	0467-86-5847
静岡青葉	第4日・9時半	大里生涯学習センター	神田美穂子	吉野美智子	054-281-9827
静岡葵	第1日・1時半	大里生涯学習センター	荻野加藤子	石川裕子	054-282-8577
静岡大里	第1水・1時	大里生涯学習センター	藤原千代子	藤原千代子	054-286-3719
静岡木曜	第3木・1時半	大里生涯学習センター	大長文昭	大長文昭	054-282-1063
小判草	第1日・9時半	静岡市番町市民センター	小川明美		054-283-5216
初花教室	第3水・1時半	大里生涯学習センター	交代制	藤原千代子	054-286-3719
登呂通信	月1回	(投句・通信)	曾根満	小川明美	054-283-6233
井川お茶壺	第4金・3時	井川生涯学習交流館	曾根満	長島操	054-260-2058
井川山法師	第4金・3時	井川生涯学習交流館	大村峰子	望月知恵子	054-260-2149
井川聖	第4土・7時	南アルプス井川観光会館	海野みち子	宮崎知恵美	054-260-2355
満点会吟行	随 時	吟行地	曾根満	小川明美	054-283-6233
小春句会	第3土・18時半	来てこ	曾根満		
風の谷句会	第2金・1時半	北部生涯学習センター	曾根満	川崎和子	054-221-7173
静岡放送俳句教室	最終土・10時	SBS学苑	曾根満	小川明美	054-283-6233
富士花野	最終金・9時半	富士駅北まちづくりセンター	神田美穂子	縣昌司	0545-63-5697
富士吟行	随 時	吟行地	神田美穂子	当番制	0545-78-0591
あかね	第1木・1時	四高記念館	井村・谷渡	後藤・豊田	076-231-4717
白 菊	第4水・1時	西光寺	中條睦子	佐野和子	076-261-2997
いづみ	第3月・1時	泉野図書館	田村愛子	田村愛子	076-242-1563
やよい	第3木・1時	泉野図書館	田村愛子	水上依乃	076-244-1530
若 草	第1土・1時	中央公民館長町館	田村愛子	田村愛子	076-242-1563
柊	第1水・1時	新保ふじ子宅	新保ふじ子	西田たかこ	076-263-2714
蘭	第3水・1時	泉野図書館	井村和子	後藤・豊田	076-231-4717
ふれあい	第1,3水・1時半	コミュニティセンター金ヶ崎	谷渡末枝	谷渡末枝	0767-68-2187
敦 賀	第1,3金・1時	北公民館	石田野武男	倉谷紫龍	0770-22-1619

句会名	開催日時	会 場	指 導	幹 事	幹事電話番号
成 田	第1日・1時半	四街道市文化センター	良太・佐奈枝・太雅	塗 木 翠 雲	043-312-0849
う す ゐ	第3月・1時	臼井ニッコー会館	内 海 良 太	横 川 良 子	043-487-2625
し お さ い	第4水・1時	船橋市勤労市民センター	内藤・松原三	片 桐 帆 一	047-426-4376
都 賀	第2日・1時	都賀コミュニティセンター	内 海 良 太	高田みや子	090-7011-6144
柏	第2日・1時	アミゼ柏	山本とく江	内 田 郁 代	04-7163-6810
柏 吟 行	隔月曜日不定	吟行地	山本・内田	当 番 制	
東 京 吟 行	奇数月	吟行地	山 田 春 生	内藤・南雲	03-5605-8445
東京俳句スクール	第2火・1時半	高井戸地域区民センター	山田・江見	吉 中・藤 田	044-986-1667
成増けやき	第2木・1時	板橋区立アクトホール	原田しずえ	下 嶽 孝 一	090-3540-7471
本 郷	第3水・1時半	文京区男女平等センター	山 本 右 近	桔 梗 純	042-726-0174
杜 の 会	第1火・1時	文京区男女平等センター	内藤・山本	草間三香子	03-3975-5983
花 桐	第3月・2時	学生の家	須 賀 允 子	加賀・喜多尾	03-3392-3281
花 桐 吟 行	第3土	吟行地	須 賀 允 子	加賀・喜多尾	03-3392-3281
小 松 川	第1日・10時	松葉会館	江 見 悦 子	田崎・長谷川	03-3682-2707
卯 月	第3火・1時	練馬勤労福祉会館	谷田部 栄	松 本 幸 男	03-3978-5226
北 町	第1日・1時	北町地区区民館	谷田部 栄	島 野 ひ さ	03-3934-6565
さ く ら	第2日・1時	練馬光が丘図書館	谷田部 栄	長谷川信也	03-3931-6200
青 の 会	第2土・1時半	木内徴子宅	徴子・允子	鶴 田 智 美	03-3713-2331
国 立 泉	第3日・1時	国立福祉会館	内 藤 恵 子	生駒・阿部	042-321-7532
青 梅	第2土・1時半	青梅福祉センター	内 藤 恵 子	藤 盛・青柳	0428-22-9070
青 梅 吟 行	隔月	吟行地	内藤・小林	小 林 珠 江	0428-22-6721
華	第1土・1時	シビル	疋 田 華 子	中 島 鈴 子	042-536-9123
浜 田 山	第4火・1時	PCH グリーンハウス	江 見 悦 子	久留島規子	03-3331-8585
横 浜	第2日・1時	かながわしプラザ	小 林 愛 子	大久保 進	044-333-1054
横浜洪福寺	第2土・正午	ほどがや地区センター	小 林 愛 子	榎 本 文 代	045-953-4246
保 土 ヶ 谷	第2木・正午	西谷地区センター	小 林 愛 子	山 崎 郁 子	045-371-1866
ひ ま わ り	第4木・1時	小林愛子宅	小 林 愛 子	西 本 才 子	045-311-4140
あ さ ひ	第4火・正午	上白根コミュニティセンター	榎 本 文 代	後 藤 晴 子	045-954-1519
磯 子	随 時	杉田地区センター	仲 山 秋 岳	仲 山 秋 岳	045-761-7105
金 沢 文 庫	第3日・1時	谷津坂会館	大 橋 雅 子	加 藤 和 子	045-773-6961

「万象」句会一覧

令和2年11月1日現在

句会名	開催日時	会 場	指 導	幹 事	幹事電話番号
中 央	第1土・1時	東京文化会館	内海良太 江見悦子	田中・加賀	043-299-2847
同 人	第4日・1時	俳句文学館	内海良太 小林・原田・山田	久保村・久留島	047-462-3711
札 幌	第1、3土・1時	道民活動センター	松原智津子	濱谷和代	011-873-7008
札 幌 北	第1、4日・12時半	篠路コミュニティセンター	岡本敬子	中鉢弘一	011-600-4411
札幌清風	第3日・11時	札幌真如院	大内和憲	大内マキ子	011-707-2259
札幌円山	第2火・6時	円山商店	松原智・濱谷	北浦詩子	090-9085-4391
新 潟	第1日・1時	新潟市中央公民館	佐藤雄二	中塚滋子	025-265-4919
新潟芽柳	第3日・1時	新潟市中央公民館	佐藤三男	倉田松仙子	025-222-8924
河 交	第3日・1時	新潟中地区公民館	佐藤雄二	佐藤幸示	025-268-3232
佐 野	第1木・1時半	佐野城山記念館	加藤季代	阿部 澄	0283-23-0747
風 車	第2土・1時	佐野城山記念館	大木 茂	芝宮留美子	0283-25-2155
昂	第3水・1時半	佐野城山記念館	亀田やす子	島田和枝	0283-23-0505
み か も	第3日・1時	関川町公民館	亀田やす子	義本美智江	0283-24-2668
新 樹	第1金・1時半	佐野城山記念館	増田幸子	上岡佳子	0282-62-5138
皐 月	第1月・1時半	城北地区公民館	増田幸子	黒川しげ子	0283-23-9596
す ず かけ	第3土・1時	佐野城山記念館	増田幸子	関口かつ子	0283-22-7394
佐野合吟行	毎月25日	吟行地	亀田やす子	芝宮留美子	0283-25-2155
二 荒	第1木・1時半	宇都宮市中央公民館	阿久津勝利	安久都 登	028-621-5780
芳 賀	第2土・1時半	芳賀町民会館	勝利・かし子	見目トキ子	028-678-1240
川越初雁	第1金・1時	川越中央図書館	原田しずえ	津金房子	049-232-0362
志木木犀	第2日・1時	柳瀬川図書館	原田しずえ	守山勝江	090-8115-6550
浦 和	第3日・1時	さいたま市民会館うらわ		中村千久	048-472-2734
千 葉	第2土・1時	船橋市勤労市民センター	内海良太 恵子・とく江 たけし	三屋英俊	043-485-7134
つばき	第1日・1時	船橋市勤労市民センター	内田郁代	久保村淑子	047-462-3711
小金原	第2、4金・1時半	小金原老人福祉センター	沢辺たけし	野田成夫	047-341-7402
西千葉	第1日・1時	千葉市C.C.松波分室	赤堀洋子	赤堀洋子	047-464-5946

東 西 南 北

消 息 等

内海良太主宰の句、「くちら」10月号の

「受贈俳誌美術館」に掲載

古文書に旅の届けや桐の花

吉野美智子さんの句、「鷹」6月号「俳

壇の諸作」で桐山太志氏が鑑賞

鴨百の着水の音続きけり

「万象」三月号より。鴨の群れの着水は

壯観である。空のどこかに空気が洩れる

ような白い飛行音がして、近づいて大き

くなったことに気が付いた時には、飛沫

を次々と立てていく。その群れの数が百

羽となると着水が終わるまで少し時間が

かかり、「続きけり」には悠久を感じる間

合いがあったのだろう。「鴨百の」から一

気に畳みかける句形に勢いがある。

北海道支部俳句作品展示会、道民活動

支援センター「かでる二・七」で、前期

・後期と開催 10月中、二度にわたる計

16日間、短冊展を開催した。会場には、

沢木欣一、細見綾子、大坪景章、内海良

太各先生方の色紙・短冊と、会員二十数

名の短冊が並んだ。詳細は1月号に掲載。

句集紹介

『福島せいぎ句集』（現代俳句文庫85）

10月1日ふらんす堂より刊行。『台湾優

遊』から『台湾抄』まで7冊の句集から

400句を収録した。ほかにエッセイと

解説。解説は台湾俳句会会長・黄靈芝

氏。

福島吉美氏、第一句集『モンローの笑

み』を、11月3日ふらんす堂より刊行。

モンローの手に溜まる秋の水

十夜寺モンローの笑む絵天井

無口なる父に据ゑをり土用灸

台湾の草餅届く誕生日

空海の御廟に供ふ阿波の蒨

昭和56年から令和元年までの362句

を収録。句集名「モンローの笑み」は、

思い出に残る2句から命名。

「秋の水」の句は、昭和62年の日米親善

俳句シンポジウムで第一席に選ばれたも

の。「絵天井」の句は、第32回徳島俳壇賞

受賞作品。

忙しい住職夫人としての暮しの傍ら、

国内外の旅日記の趣もある。

謹 告

この12月号で、万象作品選者の飛高隆

夫先生のご逝去をお知らせしました。突

然のご逝去の報に接して呆然とし、次い

で深い悲しみと喪失感に襲われています。

10月10日に救急車で掛かりつけの東京・

虎ノ門病院に緊急入院されて一週間、16

日の18時36分に亡くされました。肺が

お悪いことは承知しておりましたが、ま

さか、こんなにも早く亡くされるとは、

想像もしておりませんでした。

20日のお通夜、21日の告別式では、美

しい生花が溢れる中、安らかなお顔の先

生にお会いすることができました。思え

ば、コロナ下にあつて、2月1日の中央

句会でお目にかかつて以来のことでした。

主宰は、弔辞の中で先生の最後の句を

紹介されました。

流れ星見たことにして眠りけり

この句を「辞世の句」と表現された、

主宰の言葉が胸に響きました。

飛高隆夫先生のご冥福を心よりお祈り

申し上げます。

（報・江見悦子）

令和三年

万象作品

四
月
号

(句の表記は歴史的かなづかいで) (一月十五日締切)

都または市・町・村名

がふなり

姓 号

年齡

[illegible]

送り先 〒166-0003 東京都杉並区高円寺南3-52-8 藤田裕子

新規会員を紹介します	
姓	号
郵便番号 〒	
住	所

投句者住所 〒

投句者姓号

電話

紙上全国俳句大会 投句用紙

※作品集への連続掲載を避けたい方は、用紙をコピーして一組ずつお書きください。

切取線

(電話)

—

12月15日 投句締切

※投句は一人上限四句（二組）までです

住所

三

1

姓 号

宛先

$$\begin{array}{r} \overline{\text{T}} \\ 277 \\ | \\ 0027 \end{array}$$

柏市あかね町24
|
9

内田郁代

あとがき

▽飛高隆夫先生の論文集『中原中也の時間』(平成28刊)のあとがきにこうありました。

卒業する学生たちに一言を求められると「まぶしくなつたら、日蔭に這入り、そこで地面や、草木を見直す。」という中原中也の詩の一節をよく書いたことを思い出す。残された日々を、そのような気持ちで生きていけたら、とも思う。

先生の、俳句への取り組みの神髄に触れた思いでした。合掌。(江見)

▽今年は新型コロナウイルスの蔓延により生活環境が大きく変化しました。収束の見通しがなく、不安を抱えたまま年を越すことになりました。制限のない日常に戻る日が来るのを願うばかりです。(茂)

▽『美しい日本の名俳句一〇〇〇』(今井義和編・彩図社)という文庫本が出ました。項目立てが季語別ではなく、詠まれている句材別にまとめられています。例えば、第二章【施設】には、

神社、城、橋、駅などが並び、それらにまつわる名句を季節ごとに紹介しています。重宝な一冊です。(千久)

▽コロナウィルスに振り回された一年でした。俳句の場でも種々の対応を余儀なくされましたが、みなさんの前向きな姿勢に励まされ、編集作業を続けられたことに感謝です。(規子)

▽「逝く年は音さえ立てぬ 野の末の流れのように 年が逝く風に光つて」昔歌つた合唱曲の一部です。今年も逝きます。来年はどんな年になるのでしょうか……未来多福。(英俊)

▽ほとんど句会のない一年でした。久しぶりに参加した句会。この出会いを楽しみに、俳句を続けているのだと実感しました。(純)

▽秋になると、読みたくなる本があります。高木卓著『露伴の俳話』です。昭和15年から17年、親戚が集まって露伴に俳句をみてもらった時の記録です。露伴の、べらんめえ口調もたのしく分かり易く説いてくれている。何時読んでも新鮮。外出出来ない日々につけてです。(郁代)

会員を募ります

会員は左記の会費(誌代)を前納していただきます。

半年分 六、〇〇〇円
一年分 一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。郵便振替口座 00230・0・103581

万象俳句会

住所変更等 住所変更、会費納入、退会等については左記にご連絡願います。
〒285・0922
千葉県印旛郡酒々井町中央台1-17-12
竹澤 誠 治

万象 十二月号

第十九巻 第九号
通巻 第二二五号

令和二年十二月一日 発行

主宰 内海良太
発行人 江見悦子
編集人

〒168-00072

東京都杉並区高井戸東一三二-161 603

万象発行所

☎〇三六三三四一五七九六

令和二年「万象」紙上全国俳句大会案内

令和二年度の「万象」の主要各種大会や句会は、感染症の拡大により、中止や延期を余儀なくされています。このため、同人、会員が一堂に会しての研鑽の機会と場が失われ、皆様には残念な思いをされていると思います。

この度、それ等を補う意味で、「万象」紙上全国俳句大会を実施することといたしました。新同人はもとより、各支部、各県を挙げて、同人・会員の皆様の参加を期待しております。

投句 当季雑詠 二句一組（十一・十二月号添付の投句用紙を使用）

*上限を四句（二組）とします。

投句料 無料

締切 令和二年十二月十五日

投句先 千277-0027 柏市あかね町二十四-九 内田郁代
内海良太主宰、小林愛子副主席、江見悦子編集長、内田郁代総務主任

▽北海道 松原智津子・岡本敬子 ▽新潟 佐藤雄二 ▽栃木 亀田やす子・増田幸子

▽埼玉 山本右近・中村千久 ▽千葉 沢辺たけし・山本とく江 ▽東京 山田春生・内藤恵子

▽神奈川 柳澤宗正・榎本文代 ▽静岡 神田美穂子・曾根満 ▽石川 井村和子・中條睦子

▽福井 石田野武男 ▽徳島 福島せいぎ ▽沖縄 呉屋菜々・前田貴美子 計二十五名

作品集（選句集） 全同人、会員に送付（選者の選評有）「万象」誌三月号と同送する予定です。
主宰・副主席特選に色紙・短冊を贈呈

令和二年「万象」紙上全国俳句大会委員長 内海良太

実行委員長 江見悦子

事務局長 内田郁代